
続・暗黒ノ町 ~ R e w a r ~

R I C O

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

続・暗黒ノ町 ｝ R e w a r ｝

【Nコード】

N8644C

【作者名】

R I C C O

【あらすじ】

「暗黒ノ町」続編。殺し屋を辞めたサエラ。ハーツ社長となったリユート。平凡な毎日をごす二人だが、ルイから入った情報によって一変する。二人の運命は？（前作を読んでいなくても支障はありません。 週1〜2回更新予定）

登場人物

・サエラ（27）・・・身長：160センチ　使用銃：ウルサー PPK（32口径）

暗黒の町マラザに住んでいる、元殺し屋。
現在は世界最大規模の貿易会社、ハーツの警備課に配属されている。

ウルサー PPKを愛用しているが、ハーツ警備課の方針により、
代わりに九ミリ拳銃を持たされている。

・ルイ（45）・・・身長：178センチ

暗黒の町マラザで、バーを経営する。情報屋。
裏では仲介役として依頼を受け、殺し屋に仕事を紹介している。

サエラと古くからの付き合いで、サエラが殺し屋を辞めてからも、
マラザ内の様々な情報を提供している。

・リユート（25）・・・身長：182センチ　使用銃：ニューナンブM60（38口径）

貿易会社ハーツの社長かつ、警備課責任者。
リユートの母であり前社長のケイトが亡くなつて、

会社を引き継ぐことになつたが、社長業は重役に任せている。

正義感が強いが、身体能力は一般男性の平

均並み程度。

サエラに好意を寄せている。

・ダン(32)・・・身長：203センチ　使用銃：デザートイ
ーグル(50口径)

狙っていた殺し屋。
ハーツ前社長ケイトの依頼によって、サエラを

ケイトの死により、サエラを殺さなかった。

マラザ内に身を置いているが、詳細は不明のま

ま。

ルイが調査を進めるうちに、徐々に正体が明らかになる。

かになる。

・マハト(30)・・・身長：190センチ　使用銃：コルト・
ガバメント(45口径)

裏世界で有名な、実力派の殺し屋。

殺し屋の頂点に立ち、彼に憧れる殺し屋も多

かった。

だが何故か数年前に豹変し、殺人鬼のように

なってしまった。

実力のある人間だけに、それ以来は殺し屋か

らも恐れられている。

〈第一段階〉【1】近況報告

『Town of darkness』 暗黒の町。「暗黒の町」と呼ばれるマラザの中で、最も闇に包まれた地域に、この名のバーが存在する。

深夜0時過ぎ。定休日となっているバーには、薄いオレンジ色の明かりが灯っている。カウンターに店主のルイ、バーには一人の女性。ピンクと赤の混じったような色のカクテルをじっと見つめながら、頬杖をついている。

「気に入らないか？ 色、味、それとも？」

「別に、気に入らないわけじゃないわ。ただ……甘すぎるのよね、これ」

「それを気に入らないって言うんじゃないのか？」

ルイはそう言うと、焼酎のボトルを手にした。

「やっぱり、サエラにはこれがいいか」

静かに苦笑するルイを、グラスを差し返しながら眺めるサエラ。

「新作をお前に試飲してもらおうと思った、俺が間違っていたみたいだ」

「そうね、別の人に試してもらって。私にはカクテルの良し悪しなんて、よく分からないし」

ルイから焼酎の入ったグラスを受け取ると、サエラは満足げに口をつけた。

「仕事はどうだ？」

タバコを啜えながら、ライターを片手にサエラを見下ろすルイ。

「どうって、何が？」

「ハーツに勤め始めて、もう半月近く経つだろう。慣れたか？ 仕事にも、人にも」

ルイの問いに、サエラは少し考えながら語った。

「平凡な毎日よ。入社の手続きつてのは、面倒な上、よく分かんなかったけど。それ以外は、与えられた作業をこなすばかり。面白くないわ。何か大きな事件でも起きれば別だけどね。貿易会社なんて、起こるトラブルも似たようなものばかりだし。」

それに、警備課に配属されたつていうのに、銃は九ミリ拳銃しか持たせてもらえないのよ？ あんなの、自衛隊が訓練で使う銃じゃない。今更だけど、気楽だったと思うわ 殺しをしてた頃は」

世界を股に駆ける貿易会社、ハーツで働きだす前。サエラは殺し屋として生きてきた。サエラが殺し屋を辞めることになったきっかけも、実はハーツにある。

サエラが最後に受けた依頼は、ハーツの女社長であるケイト殺害だった。だがそれと同時期、サエラ自身がある殺し屋に命を狙われてしまったのだ。それは、依頼主であるケイトが雇った殺し屋、ダン。ケイトはダンに、自分の命を狙う者 サエラの殺害を依頼したのである。

だがケイトは、息子のリユートと銃を奪い合っているうちに、弾の乱発で事故死してしまった。そのため、サエラの依頼は終わってしまったのである。そして、ダンの依頼も。依頼主であるケイトが死んだ以上、ダンは報酬を得ることが出来ず、サエラを殺すことには何の意味もなくなったからだ。

だがサエラは、ダンのことを警戒していた。ダンの持つ雰囲気は、そこらの殺し屋のレベルとは、桁違いのものだと感じ取ったのである。

ケイトが死んだ後、一人息子のリユートがハーツを引き継ぐことになった。リユートはそこに、サエラを誘い込んだのである。リユートは、実はサエラに好意を寄せていた。サエラは依頼中、ハーツに警備関連事務所として潜入しており、そこでリユートと知り合っ

た。リユートはそれから、サエラを好きでいたのだ。

リユートの熱心な説得の末、サエラは殺し屋と言う道を捨て、ハーツに就職することを決めた。人を殺して自分が生きる、そんな人生しか知らなかったサエラに、リユートが手を差し伸べたのだ。

それでもサエラは、生まれてから住んでいるマラザから離れることなく、殺し屋を辞めてからも、時々ルイの店に顔を出していた。

「まあ、殺し屋は自分一人の責任で何とでもなるからな。会社

しかもハーツのように世界的規模で動いてるところじゃ、今まで殺し屋をしてたお前にとっては、堅苦しいかもしれないな」

煙を吐き出したルイは、早々にタバコを揉み消した。

【2】真意

「で、新しい社長はどうなんだ？」

新しい社長、ケイトから会社を引き継ぐことになった、リユートのことである。

「ケイトが死んだショックは、まだ消えてないみたいね。社長って言っても、ケイトがやってた作業は重役が引き継いでるし、アイツは相変わらず警備課の責任者としてやっているわ。社長なんて、名ばかりのものね。……でもまあ、頑張ってるわよ？ 私にも、ちゃんと仕事を教えてくれるし」

つまらなそうに言うサエラに、ルイは意地悪い笑みを浮かべた。

「俺が言ってるのは、仕事のことじゃない。お前との関係のことだ。あれだけ熱心な告白を受けておいて、知らん顔してるのか、お前」

「当たり前じゃない。私はね、アイツの気持ちがどうだろうと関係ないんだから。ハーツに就職したのは、少し“外”の世界を見てみようと思ったからっていうだけよ」

焼酎を流し込み、サエラは空いたグラスを置いた。

「可愛くない女だな。せつかくお前を好きになってくれた、物好きがいるって言うのに」

「ちよっと、どういう意味？」

「冗談さ。何にしても、あんまり意地を張り続けるのも良くないぞ？ お前だって、多少は彼を意識してるんだろ？ だから殺し屋の道を捨てた。違うか？」

ルイの問いかけに、サエラは沈黙した。だがすぐに、大きく溜め息をついた。

「何度も同じことを言わせないでよ。あくまで社会勉強のためなの、ハーツに入ったのは」

「ふっ まあいいさ。それより、明日も朝から仕事なんだろ？」

そろそろ帰らなくて大丈夫か？」

時計を指すルイ。

「そうね。今夜の代金も、アタツシユケースから抜いておいて」
アタツシユケースとは、ケイト殺害の報酬として受け取ったものだった。ケイトは事故死だったわけだが、依頼主はそれを知らない
ので、約束どおり報酬はサエラに渡ったのである。

だがサエラはそれを受け取らず、ルイに渡した。これからの付き
合い、そして飲み代に対する、先払いである。

「じゃ、帰るわ。また来るから」

サエラは立ち上がると、ルイに背を向けた。 が、ふと振り返
った。

「次は、アイツも連れてくるわ。気に入ったみたいなのよ、この店
を。華やかな街ジュエルに住む大企業の社長が、暗黒の町マラザの
闇の中にある、しがないバーを気に入るなんて 物好きがいるも
のね」

先程のルイの発言に対して向けた、サエラの嫌味。ルイは苦笑し
つつ、「ああ」と頷いた。

「今度は、ちゃんと気の利いた食事を用意できるようにしておく。
前に二人で来たときは仕入前で、簡単なものしか出来なかったから
な」

「そんな気を遣わなくてもいいわよ、古い付き合いなんだから」

サエラが微笑むと、ルイは一瞬遅れてクスツと笑った。

「何よ、人の顔を見て笑うなんて。失礼ね」

「いや……いい笑顔だ、サエラ」

「ちよっと、何それ……私はいつも同じよ。変なこと言わないでよ
ね」

照れたように言ったサエラに、ルイは軽く手を挙げた。

「独り言だ。じゃあな」

「ったく、変な人。じゃあ、また近いうちに」

サエラは今度こそ、ルイに背中を向けた。入り口のドアを開け、深夜の馬拉ザに踏み込む。サエラの自宅は、馬拉ザでも奥地といえる地区だ。元々その自宅は、サエラの事務所と兼用だった。

サエラは殺し屋をしていた頃、表の顔として「警備関連事務所クリアーネット」を経営していた。クリアーネット所長としてターゲツトに上手く近付き、依頼を遂行してきたのである。

ケイト殺害依頼のときも、サエラは同じ方法でケイトに近付いた。今はもう閉鎖状態だが、特に改装することもなく、事務所の看板を取り下げただけとなっている。

自宅に着くと、サエラはシャワーを浴び、明日の仕事に向かう準備をして、ベッドに入った。時刻は深夜二時をまわっている。

目を閉じていると、どこからか銃声が聞こえた。そして、何人かの争う声。それでも何も気にすることなく、サエラは眠りに落ちていく。サエラにとって　馬拉ザの住人にとって、それは日常なのである。

【3】ハーツの朝

「おはよう、サエラ。いい天気だね。雲ひとつ無いよ」
にこやかなリユートの笑顔に迎えられたものの、サエラは呆れた表情で返した。

「呑気に『いい天気だね』じゃないわよ。アンタ、社長なんだからね。もっとこころ……ビシッと出来ないの？ 初めて会ったときは、すっかりしてる印象があったのに。眼鏡に超小型隠しカメラを埋め込んで、私を試そうとしたりね」

「あのときは純粹に、サエラの実力がどれ程のものを確かめたかったんだ。警備課責任者としての血が騒いだって言うか」

「ま、あっけなく私が見破ったけれど」
ハーツビルのロビーを抜け、エレベーターに向かうサエラ。それを慌てて、リユートは追いかけた。

「とにかく今は、毎日こうして君と仕事が出来るんだから、自然と笑顔になっちゃうんだ」

その言葉に、サエラは立ち止まった。そして、リユートの方を振り返る。

「よくそんなこと言えるわね。恥じらいは無いの？」

「だって……どうせサエラには、僕の気持ちが知られてるわけだし。だったら、思ったことを素直に言った方が、サエラも分かりやすいだろ？」

そう言いながら、リユートは頬を赤らめている。

「私だって、どうせ元は殺し屋だってバレてるんだから、もう安タに営業スマイルを向けたりしないわ」

再び歩き出したサエラの背中に、リユートは声をかけた。

「僕は過去のことなんて気にしないよ」

小走りで追いついたリユートは、並んでいるサエラの横顔を優し

く見下ろしながら歩いた。

エレベーターの前に着くと、リユートは上に行くボタンを押した。二人が向かうのは社長室。社長室から、ビル内放送で朝礼を行うためだ。ハーツの朝は、この朝礼から始まる。

前社長のケイトが死ぬ前、社長室は最上階にあった。百階建てビルの百階。そこはカードスキャン式で、限られた人間しか入れないようになっていた。だがそこは、悲劇の現場となってしまった。社長室は、ケイトが死んだ部屋となったのである。

あの事件以来、リユートは社長室に行くのを嫌がり、最終的には百階に続くエレベーターを止めた。今はもう、百階のフロアに行くことは出来なくなっている。その代わり、五十階にある大会議室が、社長室代理とされた。九十九階にある予備の会議室を全て壊し、社長室を再現する工事の間、臨時的に使われる。

五十階に着いてエレベーターを降りると、二人は正面にある大会議室に入った。社長席、応接用のテーブル、簡易給湯所と冷蔵庫、朝礼用の放送室へ続くドア。

臨時的に作られているだけなので、広いだけで殺風景だ。元々会議室にあった長机とパイプ椅子だけ、部屋の隅に積み上げられている割に、やたらと存在感がある。

「朝礼までは……あと三十分か。やることも無いし、コーヒーでも飲もうかな」

リユートは仮設の給湯場所で、コーヒーのドリップパックを手にした。

「何だか庶民臭いわね。こんな大きな会社でも、ドリップパックなんて使うんだ。……って言うより、そんなこと秘書か誰かにやらせればいいのに」

応接用のソファに腰掛けながら言うサエラ。

「このくらい、僕だって出来るさ」

「そういう意味じゃないわよ。社長なんだからさ、そんなこと誰か
にやってもらえばいいのよ。自分でコーヒーを淹れる社長なんて、
見たことも聞いたこともないわ」

「ん、でもいいんだ。社長って言っても、業務は任せっきりだし。
僕はあくまで、警備課の人間さ。僕にふさわしい課だって、母さん
が言ってくれた……」

ふと、リユートの言葉が止まる。ケイトを思い出して、気分が落
ち込んだのだろう。サエラは面倒だな、と思いながら、話を切り替
えた。

「じゃあ、私の分もコーヒー淹れといて」

「あ、うん。任せといて」

気を取り直し、リユートはコーヒーを二杯分淹れた。そのカップ
を持ち、サエラの腰掛けている前に座る。そして二人揃ってコーヒ
ーを飲み始めた。

「そう言えば……一つ聞いてもいいかな」

リユートの問いかけに、サエラは眉をひそめた。

【4】サエラの過去

突然、何を聞きたいというのか。疑問に思ったサエラだが、取りあえず聞いてみることにした。

「何よ」

「ちょっと気になってたんだけど。サエラって、誰かと付き合ったこととかあるの？」

唐突な問いに、サエラはカップをテーブルに置き、リュートを眺めた。

「何でそんなこと聞くの」

「いや、だから、気になって」

リュートはそう言うのと、まだ熱いコーヒーを冷ますように息を吐いた。

「殺し屋と付き合いたい男なんて、いると思う？」

「うん、だから恋人も殺し屋だったのかな、とか思って」

「……殺し屋と付き合ったことは無いわ」

サエラは昔を思い出すように目を閉じた。

「それじゃあ、殺し屋以外の人と付き合ったことがあるってこと？」

「私が殺し屋になる前よ。殺し屋になってからは、誰とも付き合っていない。私にとっては、仕事が恋人のようなものだったから」

目を開いたサエラは、再びカップを手にした。

「いつから殺し屋に？」

「十年以上前よ。私が十六のとき」

「十六！？ それって高校生じゃないか！」

リュートの驚きに、サエラは首を振った。

「私は高校には行ってない。そう、ルイと出会ったことがきっかけで、私は殺し屋になったの。懐かしい記憶だわ」

サエラはゆっくりと、自分の過去を語り始めた。

「私が中学を卒業したあと、高校への進学が決まっていたとき。両親が事故で死んで、私は一人で生きていくことになった。絶望したわよ。何もかもがどうでもよくなってるね。高校進学は辞退することにした。」

私の家は、マラザの中でもジュエル寄りの地区にあっただけで、両親の遺影を前にして、楽しそうなジュエルの賑わいが聞こえてくると、怒りが沸々とこみ上げてきた。だから私は、マラザの奥地へと踏み込んだの。両親ですら『近付いちゃダメ』と言っていた、マラザの闇の中に。

一人でふらふらと歩いてた夜、ある一角に『Town of darkness』という看板を見つけた。そう、ルイの経営するバー。『暗黒の町』と呼ばれるマラザを象徴したような店名。何のお店かは分からなかったけど、私は取りあえず、そのドアを開けてみた。

当時も、今と変わらない内装だった。カウンターにはルイがいて、お客さんがポツポツとテーブルについていて。カウンターには人が座っていないから、私はそこに座ったの。

ルイは私が未成年ってことにすぐ気が付いて、『帰りなさい』と言ったわ。『両親が心配するだろう』って。

全くもって最悪のタイミングだったと思う。私はルイに向かって叫んだわ。『黙れ！』って。ルイはもちろん驚いていたし、店内の客も一斉に、私の方を向いた。それでも私は、ルイを睨み続けたの。両親を失った怒り。それを無関係な人間にぶつけたって、何も変わりはないのにな。

ルイは突然、『悪い、今夜は店じまいだ』と言ったわ。客も、居心地が悪かったんでしょね。すぐに帰っていったわ。私以外は。私は相変わらず、ルイを睨み続けていたの。するとルイは、懐から

ハンドガンを取り出した。しかも、その銃口を私に向けたの。

殺される そう思った。でも、もう殺されてもどうでも良かったよ。生きてたって、どうせ私は孤独。死のうが生きようが、大して変わりはない。そう思ったら、別に怖くなんて無かった。むしろ、私は殺されたかったのかもしれない。

私が動じずにルイを睨んでいると、ルイは銃を下ろした。『根性の座った女だ。どうだ、酒でも飲むか』 初めて酒を飲んだのが、その夜。

一晩中、ルイと語り明かしたわ。ルイが殺し屋の仲介役をしている、情報屋だつてこと。マラザの裏社会の話。

子供にするような話じゃないんだろうけど、ルイは躊躇うことなく話してた。私に殺し屋になる素質があるって、見抜いていたんでしょっね」

語り終わったサエラは、大きく息を吐いた。

「何だか話がそれたわね。私に恋人がいたのは、中学三年の秋頃だけよ。それ以来、私は誰とも付き合っていない」

サエラは懐かしむように、目を細めた。

【5】頂点に立つ者

サエラの過去を聞いたリユートは、今まで分からなかった部分に触れることが出来て嬉しい気持ちだった。

「そんなふうに関自分のことを語ってくれたの、初めてだね」

「そうかもね。でも、もう全て終わったことよ」

コーヒーを飲み干し、サエラはそう締めくくった。だがリユートは、さらに質問を続ける。

「中学生のときは、どんな恋愛をしてたの？ 付き合った経緯とか、どんな付き合いをしてたのかとか。好きになっただいきさつとかは？」
興味津々、そんな様子である。

「別に……相手から告白されたから、取りあえず付き合い合ってみたのでも、何の感動も無かったわ。私は彼を好きだったわけじゃないし、嫌いではなかったけど。キスするのが苦痛だったりしたわね」

「キスが苦痛？ どういうこと？」

「気持ち悪いじゃない。他人の舌が、自分の口の中に入ってくるなんて」

思い出すかのように、顔をしかめるサエラ。リユートは口を尖らせた。

「うーん、過去の恋愛に興味はあるけど、何だか悔しいな」

「悔しいって、何が」

「いや、こつちの話。気にしないで」

リユートは照れ笑いを浮かべると、コーヒーを一気に流し込んだ。そして、サエラの分のカップも持って立ち上がる。

「じゃあ、今まで人を愛したことは無いの？」

カップを片付けに行くリユートの後姿を眺めながら、サエラは考えた。

「ある、のかな」

カップを流しに浸け、リユートは振り返った。

「かな、ってどういうことだよ。自分の気持ちなのに、中途半端だなあ」

「恋したっていうよりも、憧れてた人ならいる」

「憧れ？」

リユートがソファに戻ってくると、サエラは話を再開した。

「そう、私が殺し屋になってすぐのことよ。彼は殺し屋界で、最も有名な人間だった。名前はマハト。実際に会ったことは無くて、モノクロ写真でしか見たこと無いけど。私より、三つ年上の人よ。」

彼はマラザの裏世界で、トップクラスの實力を持っていた。どんな無茶な依頼でも受ける胆力。速やかな依頼遂行。そして、その風貌。スタイル抜群、整った顔立ち。

会ったことも無いくせに、彼に憧れていたわ。その銃使いを見てみたい。彼が飛び散らせる、人間の血飛沫を見たい。それを想像したら、身震いがするくらいだった。

でも彼は突然、恐ろしい人間に豹変してしまった。理由は分からない。彼はいつしか、依頼とは関係の無い人間も殺し始めた。例えば 依頼主でさえも。

例えば依頼主が、彼が満足できるだけの依頼料を用意できなかつたとき。彼は迷うことなく、その依頼主を撃つたらしいの。それこそ、依頼料が入らなくなるというのに。

『彼は殺しの快楽に溺れてしまった』って言う説が流れたわ。彼は人を殺すことが生きがいになってる。いつの間にか、誰にも手がつけれなくなっていた。彼に依頼をする人間は激減。残ったごく一部は、大規模なテロ組織だったり、重犯罪に手を染めてる人間ばかり。

そして、彼の信頼は薄れていった。そして、逆に恐れられるようになったのよ。殺し屋からも。そのくらい、彼の殺しは理不尽なものになってしまったてらしいから。

彼と関わったことがある人間は、もしかしたら自分が殺されるかもしれないと、常に銃を持ち歩いてみたいよ。そんなことしたって、彼に狙われたらひとたまりも無いのに。会ったことの無い私は、大して気にしなかったけど。

あまり表には顔を出さないけど、今もマラザのどこかで暮らしてらしいわ。ひっそりと、暗い場所で。殺しだけを生きがいとしてね。憧れた殺し屋がそんなことになって、私の彼に対する興味も薄れたわ。ただの人殺しに、用は無いもの」

サエラの語りにも、リユートは少し納得いかないものがあつたようで、腕組みをした。

「何よ、不満？」

「不満って言うか……それって、恋愛的な意味で憧れてたわけじゃなくて、殺し屋としての実力に憧れてたって言わない？」

リユートが聞いたかったのは、恋愛の話なのである。確かにサエラの言う「憧れ」とは、マハトという人物の実力に対するものだろう。

「何でもいいじゃない。ほら、もう朝礼の時間よ」

時計を確認すると、朝礼の時間が迫っていた。

「あ、本当だ。いろいろ聞かせてくれてありがとう」

リユートは急いで立ち上がると、放送室へと向かった。

〈第二段階〉【1】情報

それからの日々も、何事も無く過ぎていった。毎日ハーツに出向き、ビルの見回り、不審物のチェックを行う。殺し屋をしていた頃は、毎日違った刺激があった。だが今の状況は、サエラにとって単調なものでしかない。

何か面白いことでも無いか……そんなことを考えていたとき、ルイから連絡があった。それは、とある情報を手に入れたというものである。サエラは仕事を終えたその日の深夜、定休日のバーに足を運んだ。

「明日は仕事が休みだし、今日はゆっくり飲んでいくわ」

サエラとルイしかいない、薄暗い店内。深夜過ぎの静けさ。

「焼酎、新しいものを輸入してあるぞ。飲むか」

聞きながらも、ルイはグラスを準備している。

「そうだ、お前が『甘い』って言ったカクテル。正式に店に出すことにした。カクテル好きの常連に試してもらったら、『女に人気が出そうな味だ』って言われてな」

「そう、良かったわね。ま、女でも私には甘すぎるけど。何て名前にするの？」

ルイは真顔で答えた。

「ピンキー・スイート。ピーチベースのピンク色に、甘いテイストからだ」

サエラは突然、笑い出した。

「似合わないわね。ルイの口から、そんな可愛らしい名前」

「失礼な。俺だって、女性受けしそうな名前を考えることくらいする」

ムツとしながらも、ルイは焼酎をグラスに注ぎ、サエラに差し出した。

「で、本題だけど。私にぜひ教えたい情報って、何なの？」
グラスの中身を見ながら、サエラが問う。

「ああ、アイツのことだ。ハーツ前社長、ケイトの依頼を受けた殺し屋　ダン」

ルイの口から出た名前に、サエラは顔を上げた。

「お前が今あの男から狙われてるわけじゃないし、お前も殺し屋を辞めたわけだから、何か役に立つ情報とも言えないんだが。お前なら興味を持つだろうと思ってな」

「そりゃ興味あるわよ。あれだけのダークな雰囲気を持つ殺し屋、私があつた中では初めてなもの」

サエラの言葉に、ルイは頷いた。そしてカウンター内に腰掛けると、タバコに火をつけながら、ダンについて分かったことを語った。

「ダン　年齢三十二歳、身長二百三センチ。一年中、黒いトレンチコートに身を包んでいる。体格がでかい割に、動きは俊敏で、銃の腕前も上級。今はマラザ内に身を置いているようだが、この町の出身ではないらしい。サエラがダンを全く知らなかったのも、無理はないな。」

奴は殺し屋と言っても、お前みたいな殺し屋とはジャンルが違う殺し屋だった。『殺し屋の殺し屋』　そう、奴がターゲットにするのは、殺し屋だけ。

『殺し屋を殺して欲しい』。奴が受ける依頼の条件は、それだけだ。依頼料には、何のこだわりも持っていないらしい。ちなみに、ケイトの依頼を受けたのは、ハーツに潜入してるお前が殺し屋だと知ったからだっただろう。

だが奴は、すぐにはターゲットを殺さない。お前のように、命が狙われてることに気付くかどうか。気付いたとしたら、どんな対抗

手段を取ってくるか。それを楽しみにしているらしい。同じ殺し屋として、ターゲットの力量を見たいのかもしれないな」

ルイはタバコを揉み消し、話を締めくくった。

「殺し屋の、殺し屋……」

グラスを持ったまま、サエラが呟く。

「じゃあアイツは、今まで多くの殺し屋を殺してきたのかしら」

「そうだろうな。マラザの殺し屋でも、数人だが行方不明者が出ている。もしかしたら、そいつらは殺されているのかもしれないな」

ルイが言うと、サエラは「そうね」と頷いた。

「殺し屋を辞めたお前は、もう奴に狙われることも無い。最も、お前を殺して欲しいなんて依頼する奴も、もういないだろう。安心だな、これで」

「確かにそうかもしれないけど……」

何だか納得のいかない声を出すサエラに、ルイは首をかしげた。

「不満でも？」

「そういうわけじゃないけど……。私は殺し屋を辞めたんだって、改めて実感したのよ」

焼酎を飲み、サエラは溜め息をついた。

「ウルサーPPKのグリップの感触、今でも手に残ってるわ。ねえ、ちよつと出してよ」

ルイは頷くと、酒のボトルの並んだ棚の奥から、サエラから使っていたハンドガンを取り出した。

殺し屋を辞め、ハーツでは九ミリ拳銃しか使えなかったため、サエラはルイにハンドガンを預けていたのである。ルイからそれを受け取ると、サエラは銃を構えてみせた。

【2】懐かしい感触

「ふふ、たまらないわ、この感触。私に似合うと思わない？」

「元はと言えば、俺の銃だろう」

半ば呆れたように、ルイは向けられた銃口を見据えた。

サエラが長年、愛用してきた銃「ワルサー PPK」。それは元はと言えば、ルイの所有物であった。ごく普通の十六歳だったサエラが、銃を持っているはずも無かったので、殺し屋になることが決まったとき、ルイがサエラに渡したのだ。

ルイは護身用に銃を何本か持っていたのだが、その中でも古くから使っていて、思い入れもあるワルサー PPK を渡した。ルイはそれだけ、サエラの力を見込んでいたのである。

ルイの予想通り、サエラの銃の腕前は飛躍的なもので、女の殺し屋の中ではトップクラスとなった。それも、一年足らずである。

次々と依頼を紹介し、サエラもそれを簡単にこなしていく。もちろん中には、苦戦を強いられた依頼もあった。

だがそういうとき、ルイはサエラに協力者を紹介してきたのである。サエラの持っている能力、技術で足りない部分を補える人材を。高度なセキュリティを解除できる知識を持っている技術屋など、だ。

「ハーツも硬いわよね。自衛隊用の銃しか持たせない、なんて」

「殺し屋と違って、普通の企業だからな。それは仕方ないだろう」

サエラは惜しみつつ、ルイに銃を返した。棚にそれをしまい、再びサエラに向き直るルイ。

「それにしてもルイ、よくあの男の正体を掴んだわね」

「ああ、常連の中に、奴を知ってる男がいたんだ。どうも、奴と同じ町の出身らしい。その町では、奴もかなり有名な殺し屋として知

られてたらしいぞ」

「へえ……世の中って、意外と狭いものなのね」

感心したように、サエラは呟いた。そして再び、グラスを口に運ぶ。

「でも、あの男と戦わなくてよくなったのは、運が良かったのかもしれない。悔しいけど、あの男と戦っても、絶対に勝てたって自信は無いもの。それどころか、命を落としていたかもしれない」

「確かに、あの男の実力は相当のものらしいな。教えてくれた常連も言ってた」

思い出すように言うルイ。

「まあいいわ。もう戦うことも無いんだもの。会うことも無いと思うし」

「そうだ。お前はハーツの人間として、うまくやっていけばいい。

それに、お前を好きでいてくれる彼　リユートを支えてやるんだな」

「言われなくても分かっているわ。アイツ、女の私よりも身体能力が低いんだから。私がいなくちゃ、きつと何も出来ないわよ」

馬鹿にしたように言ったサエラに、ルイはからかうような笑みを浮かべた。

「いい傾向じゃないか、お前に守りたい人間ができたなんて」

「守りたいなんて大袈裟なものじゃないわよ。そのくらいしか、やることがないの。警備課に配属されたって、毎日のように何か問題が起きるわけじゃあるまいし」

「相変わらずな性格だな。殺し屋から足を洗ったんだし、性格ももう少し柔らかくなればいいんだが」

溜め息混じりのルイ。

「私は私よ。殺し屋じゃなくなっても、根本が変わったりしないわ」
「それもそうか」

二本目のタバコに火をつけると、ルイは空いたサエラのグラスに

焼酎を注いだ。

翌々日の夕方、その日の業務を終えたサエラは、リユートのいる社長室に向かった。今日の作業の報告をするためである。リユートは社長室のテーブルに向かい、溜め息をついていた。その目は、パソコンに向けられている。

「どうしたのよ、浮かない顔して」

サエラが社長席に歩み寄ると、リユートは頭を抱えた。

「ダメなんだ、業績が……」

サエラはリユートの隣に回りこむと、パソコンの画面を覗き込んだ。そこには、今月の会社収入のデータが表示されている。

「社長が僕に切り替わってから、業績が三パーセント落ちてるんだ」「別に三パーセントくらい、どうってことないでしょ。それに社長って言ったって、アンタ関係ないじゃない。警備課なんだから」

「それはそうだけど……」

大きく溜め息をつくリユートに、サエラは呆れながら腕組みした。「また来月に期待するしかないわね。重役をきつく叱ってみたら？ アンタの肩書きが社長であることに変わりないし」

「やっぱり僕も、会社の運営に携わっていいこうかなあ。このまま業績が落ち込んでいたら、母さんに失礼だ」

リユートはデータ画面を閉じると、隣に立つサエラを見上げた。

【3】危険

「ケイトは密輸に手を出して、汚い金を掴んでいたのよ？ 正しいのはアンタ。安心しなさい」

そう言いながら、サエラはリユートを見下ろした。

「母さんは、どうして犯罪に手を染めたりしたんだろう」

リユートはパソコンに目を戻して呟いた。

「そうまでして、お金が欲しかったのかな」

「それもあるかもしれないわね。でも彼女は、地位や名誉も欲しかったんだと思う。企業ぐるみで犯罪をする人たちに、多い傾向と言えるわ。とにかく、もう社長は変わったの。前のハーツの業績は、いくらか犯罪による収入もあったわけで、それが純粋な収益と考えていいと思うわ」

サエラが話をまとめると、リユートは立ち上がった。

「すごいね、サエラは。僕なんかよりも、よっぽど大人だ」

「私はすごくなんで無いわ。アンタが子供なのよ」

「ははっ、そうかもしれないね」

苦笑しながらも、リユートの表情はどこか寂しそうだ。犯罪を犯していたとはいえ、母親を亡くした悲しみは簡単に癒えないのだろう。

「そんなことより、やることが出来たわ。さつき企画部の事務所内に、不審な機械を見つけたの。いつも高度で緻密、小さなものばかりに気を配ってきたんだけど……大きいよ、その機械。二十センチ四方くらいあったわ。」

前に調べたときには無かったから、私が休んでる間につけられたみたい。何は分からないけど、調べてみた方がいいと思う。スパイか何かの可能性があるから」

サエラが話を変えると、リユートは仕事人としての顔に戻った。

「そうなの？ 嫌だなあ……。詳しい分析はできそう？」

「まあね。部屋にあった観葉植物の植木、あれの中に埋められてたんだけど。まだ掘り出さずに放置してあるわ」

「じゃあ早速、見に行ってみようか」

リユートの言葉で、二人は社長室を出た。そして掘り出すために必要な工具を持ち出し、三十八階にある企画部の事務所に向かう。

事務所に入ると、サエラたちは観葉植物の植木の前に立った。

「この中に埋まってるのが観測されたの。掘り出してみましようか」
サエラが言うと、リユートは頷いた。まずサエラはスコップで周りの土を掘り起こし、機械を取り出した。そして機械の周りについている土を、刷毛で綺麗に払い落とす。

「これは」

サエラとリユートは、しゃがみ込んでその機械を見つめた。黒く四角い本体に、デジタル画面。そこには、「29:02:23」と表示されている。

「間違いない、時限爆弾だわ。四十八時間制のものね」

「そんな、どうしてこんなものが」

目を丸くしながら、リユートはサエラを見つめた。

「この部屋で、明日行われる予定だった会議とか、そういうのは無いの？」

「え？ ……明日は、ここで企画会議が行われる予定だ」

「それに出席するのは誰？」

サエラの問いに、リユートは少し考えてから言った。

「企画部長、企画課長、貿易専門部の人間が三人、そして僕」

「六人だけ？ 何か重要な会議なの？」

「ああ。業績が思わしくないから、何か新しい事業を取り入れたいと思って……。輸入業以外に、何か手をつけれるものが無いか、話し合っつもりだったんだ」

リユートの言葉を聞きながら、サエラは時限爆弾を眺めた。その

間にも、一秒ずつカウントが減っていく。

「とにかく、まずはこれを解除しなきゃ」

サエラは持ってきた工具入れから、ドライバーとペンチを取り出した。

「って、サエラ。まさか、自分で解除するつもりなのか？」

「まあね。警備関連事務所を経営していた頃は、時々こんな依頼も受けたものよ」

得意げに言うサエラ。サエラは殺し屋をしていた頃の表の顔として、警備関連事務所クリアーネットを経営していた。そのとき、サエラは爆発物処理もしたことがあるのだ。

サエラはまず、機械の表面にあるネジを、ドライバーで一つ一つ外していった。すると四角状の機械が半分に割れ、中が露になった。たくさんコードが絡み合っている。

「赤、青、緑のコードがあるでしょう。この根元を確かめていって、順番を考えるの。順番どおりに線を切っていけば、上手く解除できるはずだわ。間違えたら 爆発だけど」

「そんな、危険だよ」

ペンチを握るサエラの手を、リユートは慌てて止めた。

【4】可能性

リユートに手を掴まれ、サエラは動きを止めた。だがすぐに、リユートの手を払った。

「じゃあ、ここでやるのをやめるわ。百階の元社長室、あそこに持つてく。エレベーターは止めてたけど、非常階段は扉に鍵がかけられているでしょう？ 鍵を貸してくれれば、私が一人で行くから。会社の人間は、九十階以下に非難させて。それだけ離れていれば、爆発しても影響は受けないと思うわ」

「僕が言ってるのは、そう言うことじゃないんだ。もし爆発したら、君は死ぬんだぞ？ そんなの、僕が許さない」

リユートの真剣な眼差しに、サエラは少し怯んだ。

「だからって……アンタが許さなくても、やらなきゃいけないじゃない。このまま放っておいたら、明日には時間が来て爆発するわよ」「警察に通報しよう。爆発物処理班にやってもらえばいいだろ？ 専門的な人たちに任せればいいんだ」

一秒ずつ減っていく数字を見つめながら言うリユート。

「今から警察に連絡する。それでいいかい？」

「……分かったわよ。好きにして」

サエラは腕組みしながら答えた。リユートは早速、携帯電話を取り出した。そして警察に通報する。

数分で電話を切ると、リユートは警察に言われたことをサエラに伝えた。

「取りあえず、このままの状態にしてくれって。今から警察が回収しに来るらしい。回収したら、爆発物処理班が解体するってさ。解体できたら、こっちにも詳しい報告を入れてくれるって言った」

リユートの言葉通り、しばらくして警察が到着した。そして慎重に时限爆弾を回収し、その場は収まった。警察を見送ったサエラと

リユートは、社長室に戻ることにした。

「それにしても……誰がこんなものを仕掛けたんだろう。それに、どうして」

社長室のソファに腰掛けながら、リユートが呟く。

「考えられる事由はあるわ」

カップにコーヒーを注ぎながら、後ろのリユートに言うサエラ。

「明日、会議があるって言ったでしょう。その会議に出席する人間の誰か、もしくは全員の命が狙われていた可能性。それが一番、高いと思う」

サエラが振り返ると、リユートは複雑な表情をしていた。

「そんな……会議があることは、社内の人間しか知らない。その内容も……。となると、犯人は社員ってことになるじゃないか」

「社内の人間がリークしたって可能性も、十分考えられるわ。あとはテロ組織とか、殺し屋とか。彼らは情報を盗み出すプロだから。社内の人間しか知らない情報だって、何らかの形で盗み出すことが出来たかもしれない」

「でも、ビル内に盗聴器とか盗撮カメラとか、怪しいものは無かったんだろう？」

リユートの前に腰掛けたサエラは、コーヒーに口をつけながら頷いた。

「確かに何も見つからなかったわ。でも、私が休んでる間につかれ、そして回収された可能性も無くは無い。一日でそれだけ出来る人間なんて、ごく僅かだろうけど。その会議の話、いつから出てたの？」

「二週間近く前かな」

リユートの答えに、サエラは考えを巡らせた。

「十日前、二連休をもらったわよね。そのときに何か仕掛けられてたかもしれない。」

でも たまたま私がいなくて、タイミングが良すぎると思うのよね。もしかしたら犯人は、私がビルのチェックをしてることも知ってるのかもしれない」

「そうか……。そんな入念に考えてるなんて、やっぱり怖いなあ。ハーツの繁栄を阻止したい誰か、もしくは組織の仕業だろうし」

溜め息混じりに言うリユートに、サエラは動じる様子も無く言った。

「だとしたら、狙われたのはアンタかもしれないわね」

「どうして！」

リユートが声を荒げる。

「新たな事業を開拓することで、ハーツの繁栄を狙ってるんでしょ？ 新しい展開を始めようとする企業を叩くには、会社の頂点に立つ人間を叩くのが手っ取り早いじゃない」

「そりゃそうだけど……。じゃあ誰が僕の命を？」

「分からないわよ。本当にアンタが狙われてると決まったわけじゃないし。あくまで可能性だから。何かもつと、別の理由かもしれない可能性だってある」

サエラはそう言いつつも、内心は焦っていた。勘のようなものだが 狙われたのは、社長であるリユートだろう。だがそれを悟られないよう、サエラは冷静に対応するのだった。

【5】狙われた人間

その日の帰宅後、サエラの元にルイから電話があった。

『まずい動きがある。店まで来い』

第一声。

「……それ、リユートが関わってるんじゃないの」
嫌な予感。

『何か知ってたのか』

「思い当たる節が。すぐに行くわ」

サエラが電話を切ろうとしたとき、ルイがそれを止めた。

『彼も連れてこれるか』

「どうして？ アイツには聞かせない方がいいようなことじゃないの？」

『いや、彼自身にも緊張感を持たせた方がいいと思ってな。今の彼に、隙ができるのは避けたい』

ルイの言葉に頷くと、サエラは電話を切り、今度はリユートに連絡した。

夜七時半。臨時閉店となった『Town of darkness

s』店内のカウンターに、サエラとリユートが腰掛けている。その前には、難しい表情をしたルイ。

「とにかく、事態を説明する」

ルイは二人に酒を出すと、すぐに呼びつけるに至った理由の話に入った。

「時限爆弾が仕掛けられていたことは、電話でサエラから聞いた。問題は、その時限爆弾が仕掛けられた理由だ。君」

リユートを見下ろすルイ。

「その爆弾は、ほぼ間違いなく 君を狙ったものだ」
ルイから出た言葉に、サエラは慌てて付け足した。

「私は言わない方がいいんじゃないかって言ったのよ。アンタ、不安になるに決まってるし……」

だがリユートは、返事をしなかった。

「落ち着いて聞いてくれ」

ルイの言葉にも、リユートは反応しない。ショックを受けているのだろう。それでも、ルイは構わずに話を続けた。

「さっき、知り合いの情報屋から情報を買ったんだ。情報屋から情報を買うのは、情報屋として悔しいわけだが……。どうしても嫌な予感がしてな。」

ハーツ付近で妙な動きがあったんだ。最初はサエラに関することかと思っただが、実は君の方だったんだ、リユート。簡単に説明すると、君を狙っているのは殺し屋だ」

そこまで黙っていたリユートが、俯きがちに「殺し屋……」と小さく呟いた。

「そうだ。しかも、ただの殺し屋じゃない。殺し屋でさえ恐れている、残忍かつ強力な殺し屋だ」

ハツとして、サエラが顔を上げた。

「まさか、その殺し屋って……」

「勘がいいな。サエラの予想通り。かつてはマラザの裏世界で、トップクラスの実力を持っていたが、いつしか豹変して殺人鬼のようになっちゃった人物　マハト」

リユートも顔を上げる。

「それって、サエラが憧れてた時期があるって言う……」

「君、マハトを知ってるのか」

驚いた様子で言うルイに、サエラが答えた。

「この前、たまたま話してたの、マハトについて。彼については、リユートも知ってるわ」

「そうか……、なら話は早いな。どうやら、依頼主が何者かは分からないらしい。殺人鬼とまで呼ばれているマハトに依頼をするってことは、余程大きな組織か何か……。何にせよ、本気で君を殺しにくるだろう。」

俺が思うに、爆弾は君を殺すために仕掛けたんじゃない。おそらく、あれは見せしめだ。覚悟しろ、そういう意味で爆発を起こすつもりだったんじゃないかと思う。

爆弾の解体結果で、それが明らかになるだろう。大した威力は無いと思う。マハトが爆弾なんて間接的な方法で、殺しをするとは思いがたい。奴は君に直接、手を下す気にいるだろう。」

ルイの話をじっと聞いていたリユートだったが、やがてサエラを見た。

「やっぱり、僕が狙われていたんだね」

寂しげな表情。サエラは顔をそらし、ルイを見上げた。

「ルイ、ワルサーPPKを出して」

「どうするつもりだ」

「決まってるでしょ。いつ狙われてもいいように、常備しておくのよ」

ルイは黙って後ろを向くと、銃がしまわれている棚の戸を開けた。

「ハーツの決まりでは、この銃は持てないはずじゃないのか？」

「この際、そんなこと言ったらられないでしょ」

銃を持って向き直るルイに、サエラはそう言い捨てた。

「でも」

リユートが口を挟む。

「でも……サエラまで危険な目に遭わせるわけにはいかない。自分の身は、自分で守る」

「何言ってるのよ。マハトの恐ろしさ、話したでしょ？ 殺しのノ

「ウハウを知らないアンタが、一人で戦える相手じゃない」
サエラは強い意思を込めた目で、リユートの瞳を見据えた。

〈第三段階〉【1】殺し屋の殺し屋

店内に、異様な静けさが広がる。皆、何かを考えるように黙り込んだ。

「サエラ」

低く響く、ルイの声。

「リユートに何を言おうと勝手だが、お前こそ分かってるのか？」
「何をよ」

睨むように見上げるサエラを、ルイは冷めた目で見下ろした。だがすぐに目をそらすと、タバコを取り出した。

「お前が対等に戦える相手じゃない」

重い一言。サエラが頭の隅に追いやろうとしていた考えだ。サエラが黙っている、ルイはタバコに火をつけながら続けた。

「マハトは今や、殺し屋と言うより殺人鬼だ。真正面から戦えば、一溜まりも無いぞ」

「戦わなきゃ、リユートが殺される。そんなの、黙って見てられないわよ」

そう言うサエラの腕を、リユートが掴む。反射的に、サエラはリユートに顔を向けた。

「ダメだ。サエラが傷付くくらいなら、僕が死んだ方がマシだ」
「ふざけないで！」

突然、サエラは大声をあげた。リユートの腕を振り払い、ガタンと立ち上がる。

「たった一人の人間くらい、守ってみせるわ。相手がどんな奴だろうと、アンタを殺させたりしない。私は元殺し屋よ？ プライドがあるの」

そう言い放つと、サエラはカウンターに背を向けて、入り口に向かった。

「ちょっと、サエラ！ どこに行くんだ」

慌てて後を追おうと、立ち上がるリュート。サエラはそれに構うことなく、ドアを開けて出て行った。

「待ってくれ」

扉に駆け寄り、勢いよく開け、辺りを見渡す。だがそこに、サエラの姿は無い。

「消え……た？」

ドアを開けつばなしのまま店から出て、リュートは闇の奥を見た。やはり、サエラの姿は無い。辺りは静まり返っている。

「素早い女だな」

店の中から、ルイの音がする。リュートは振り返ると、諦めて店内に戻った。そして席に着く。

「すごいな、君」

突然そんなことを言うルイに、リュートは首を傾げた。

「あんなサエラ、初めて見た。必死に何かを守ろうとしている、そんな真剣な姿を。サエラは本気で、君を守ろうとしてるんだ」

「サエラが、僕を……」

煙を吐き出し、ルイは灰皿にタバコを押し付けた。

「殺し屋をしていた頃、アイツの目は飢えた狼のようだった。殺すことへの快感、血の騒ぎ。サエラは殺しを生きがいとしてきたんだ。アイツから殺しを奪ったら、何も残らないんじゃないかというくらい。それ程に、殺しに依存していた。」

だがアイツは、あっさりと殺し屋の世界から抜け出した。それは、他でもない君がいたからだ。殺すことでしか生きられない人生を送ってきたサエラに、新しい生き方を教えたのが君。

サエラは強情だから認めたくないんだろうが、間違いなく君を大切に想っている。だからマハトと戦おうと思ったんだろう。足元にも及べないと分かっているも」

言い終わると、ルイは頭を掻いた。

「俺はアイツの殺し屋としての才能を買っていたんだがな。でもまあ、あんなふうになんかを守ろうとしてるアイツの姿も、見ていて悪い気はしない」

リユートはルイに、力なく微笑み返した。

「本当は、僕がサエラを守るくらい強くあるべきなんです。でも僕に、サエラですら足元に及べないかもしれないような殺し屋と、戦えるような実力は無い。どうしたらいいんでしょう、僕は」

そう問うリユートに、ルイは酒を出した。新作のカクテル、ピンキー・スウィートである。リユートは頭を下げると、グラスに口をつけた。

「方法は、無いことも無い」

新しいタバコに火をつけながら言うルイ。

「方法？」

「マハトを倒す方法だ」

リユートはグラスを置くと、興味深げに目を丸めた。

「どういうことですか？」

「マハトの真の実力は、俺も詳しくは知らない。だがおそらく、サエラが勝てる相手ではないだろう。サエラに戦えないとなるなら、対等に戦えそうな相手を探せばいいんだ」

「対等に戦える相手……」

リユートが呟くと、ルイは頷いた。

「俺が知る範囲で、マハトを倒せる可能性がある人間がいる。マハトは殺人鬼のようになってしまったが、元はと言えば殺し屋だ。殺し屋を殺す　そう、それを専門としている人間」

「まさか……」

煙を吐き出すと、再びルイは頷いた。

「そのまさかだ。以前、サエラを狙っていた殺し屋　ダン。奴な

続・暗黒ノ町 ~ R e w a r ~

ら、マハトを倒せるかもしれない
それは、一つの可能性だった。

【2】闇世界へ

「そんな」

リユートは一度グラスに視線を落としたが、すぐに顔を上げた。

「でも、どうやってダンにマハトと戦ってもらうんですか？」

「それはもちろん、奴に依頼するしかないだろうな」

「だけど、そんなの無茶ですよ。確かにダンを雇うことは出来るかもしれない。でもきつと、サエラはそれを許さないと思います。だって、命を狙われてたんですよ？」

リユートの反対に、ルイは冷静に答えた。

「君の言うとおり……サエラは反対するだろう。だが、そうしなければ君の命が危うい。それを確信したとき、サエラの意味は揺らぐと思う。その隙に付け込めば、サエラは自分で戦うことを諦めるかもしれない。」

俺は何としても、サエラに戦わせたくないんだ。命が助かって一旦は逃げ切れたとしても、奴はおそらく、地の果てまで殺そうと追いかけてくるだろう。回避できる方法があるのに、黙って見ているわけにはいかない」

「でも僕は……殺し屋を雇う勇気なんてありません」

自信なさげに、リユートは目を伏せた。

「それは俺がやろう。ダンを知ってる常連がいるから、そいつに詳しい話を聞いておく。可能なら、俺が直接、ダンに話を持ちかけよう」

リユートは目を伏せたままだったが、そのまま呟いた。

「どうして、そこまでしてくれるんですか？」

顔を上げる。

「ルイさんもサエラも、どうしてそこまでしてくれるんですか？」

リユートに見上げられたルイは、啞えていたタバコを放した。

「愚問だな」

「え？」

ルイもリユートを見下ろす。

「俺たちにとって、君はもう見知らぬ他人じゃないからだ」

リユートはハツとして目を見開いた。

「俺にとってサエラは、立場は違えど仲間だ。だから、負けが分かっている戦いに行かせたく無い。だがこのまま放っておけば、君がマハトに殺されてしまう。」

サエラもそうだ。自分が戦わなければ、君が殺されてしまう。そう思ったとき、何としてでも助けたいと思ったんだろう。俺もサエラも、君を助けたいという意味は一緒だ」

ルイの語りに、リユートはフツと笑みを漏らした。

「命を狙われて、動揺しているせいでしょうかね。大切なことを忘れていました」

「そうだ。俺たちがついてる。一人じゃない」

一人じゃない それはかつて、リユートがサエラに向けた言葉と同じものだった。

「ありがとうございます。掛け合っの、お任せしていいですか？」

僕は、サエラに話しますから」

「ああ。俺はマラザ内の情報屋でも、腕の利く方だ。ある程度スムーズに事を運ぶ自信はある」

リユートは微笑むと、再びグラスを手にした。

「美味しいですね、このカクテル」

「新作だ。サエラはイマイチだと言っていたがな」

「いえ、美味しいですよ。ルイさんの作るカクテル、そのうち全て飲んでみたいです」

微笑むリユートに向かって、ルイも珍しく笑みを浮かべた。

「そうだ。ルイさんは、情報屋になったきつかけとかあるんですか？」

リユートの問いに、ルイは視線を宙にやった。

「きつかけと言うか……自分の身を守るためかな」

「守る？」

「そうだ。この町では、いつ命を狙われてもおかしくないくらい、闇世界の情報が氾濫している。サエラも実際、何度か危険な目に遭ってきた。だが、情報屋が狙われる可能性は極めて低い。重要な情報が、闇に葬り去られる可能性があるからな。」

俺は元々、サエラのように銃の腕前も、俊敏な体も持っていない。だがその分、知識や心理戦には自信がある。だからこの道を選んだ」

ルイが語り終わると、リユートは「そうなんですか」と呟いた。

「僕には関係ないと思っていた世界。でも、僕はもう足を踏み入れてしまったんですね」

「ああ。もう後には引けないぞ」

リユートは力強く頷いた。

「じゃあ、そろそろ帰ります」

「またいつでも飲みに来い。それから……サエラのこと、頼む」
立ち上がったリユートは、驚いてルイを見た。

「サエラのことを？」

「君は以前、サエラを好きだと言ったな？ その言葉、サエラにとっては大きかったと思う。君の愛する気持ちで、アイツを支えてやって欲しい」

リユートは少し間を開けたが、すぐに大きく頷いた。

「はい。僕は弱い男かもしれないけど、サエラを愛する気持ちは、確かなものですから」

【3】説得

「そんなの駄目よ」

サエラは腕組みをしながら、前に座っているリユートを睨んだ。

「私はアイツに『いずれアンタの命はもらう』とまで宣言したのよ？ それなのに『マハトを倒してください』なんて頼めるわけ無いじゃない」

翌日の昼休み。社長室のテーブルを挟んで、リユートはサエラに話を持ちかけた。昨夜、ルイから聞いた提案についてである。

「ダンに依頼するのは、ルイさんが仲介してもいいって。常連さんで、ダンを知ってる人がいるって言うてただらう？ その人に話を聞くって」

「ルイまで……。私だって、マハトと戦えるわ」

苛立った様子で言うサエラ。

「そんなの無茶だ。言っとくけど、僕はサエラが傷付くことは許さない。マハトと戦ったら、君は大怪我をするかもしれないんだぞ？」

サエラは黙っている。ここぞとばかりに主張しようと、リユートは口を開いた。だが、すぐにサエラの声で遮断された。

「今こうして話している会話だって、マハトに筒抜けかもしれないのよ？ 例えば」

突然、サエラは胸ポケットから銃を取り出した。そして、壁に向かって発砲する。銃声とともに、壁の一部が破壊された。大きく窪んだ壁に、銃弾が埋まっている。

「何を」

リユートが驚いている間に、サエラは立ち上がって壁に近付いた。そして銃弾を取り除き、さらにその奥に手を伸ばす。

「ヒットね」

リユートの方を振り返ったサエラの手には、歪な形の黒い物体が

乗っていた。

「……それは？」

サエラはリユートの前まで歩くと、手の上の黒い物体を見せた。

「盗聴器ね。何か壁の様子がおかしい気がしてたのよ。おそらく壁の外、屋外から埋め込んだのだと思う」

「屋外って……ここは五十階だぞ！？」

驚くリユートに、サエラはフツと笑みを漏らした。

「ここが何階かなんて、専門家には関係ないわ。でもこれは、マハトの仕業じゃない。おそらく関係の無いスパイか何かよ。営業成績でも盗み聞きするつもりだったのかしらね」

盗聴器の残骸を睨みながら、サエラは呟いた。

「どうしてマハトの仕業じゃないって分かるんだ？」

「馬鹿ね。これがマハトの仕業かもしれないって疑うなら、アンタが話を始めた時点で止めたわよ。」

根拠は一つ。マハトはこんな間接的なやり方はしない。マハトはもう、殺しに洗脳されているの。盗聴器を仕掛けて相手の様子を探り、じつとチャンスを伺う……そんな回りくどいこと出来ないわ。奴は間違いなく、アンタを直接狙ってくる。マハトが仕掛けるのは盗聴器なんかじゃない。真つ向勝負よ」

リユートは感嘆の声を漏らした。

「さすがサエラ。そこまで考えられるなんて。それにしても、

僕にマハトと戦う力なんて無い。だからやっぱり、ダンに依頼をすべきだと思うんだ。ルイさんだって、常連さんに話を聞いてくれる。」

それに、何だかんだでダンは殺し屋のプロだ。だからこそ、依頼があればサエラとは関係なく、ちゃんと遂行してくれるに違いないよ」

サエラは黙っている。

「僕のために、サエラが戦おうとしてくれる気持ちは嬉しいよ。でも、それでサエラが傷付いたら意味が無い。サエラはもう、殺し屋をしていたときは違うんだ。今はハーツの社員であり、僕を支えてくれる存在でもある。分かって欲しいんだ、僕の気持ちを」

リユートの真剣な説得を聞きながら、サエラは目を閉じた。

「分かったわよ。アンタの言うとおりにすればいいんでしょ」
溜め息をつきながら目を開けると、リユートが安堵の表情を浮かべているのが目に入った。

「私が折れたのが嬉しいの？」

「違うよ。安心したんだ。ダンが引き受けてくれれば、サエラは傷付かずに済むんだから」

「そんなこと言って……奴が引き受けなかったらどうするのよ」
リユートはそれでもにこやかだった。

「大丈夫、きっと引き受けてくれるよ。殺し屋の殺し屋　そのプライドは、君以上のものだと思うからね」

「……まあいいわ。それより、ルイが話を持ちかけるってことになつてるのよね？　それはいつになるの？　早くしないと、マハトが先に動き出すかもしれないから」

「ルイさんが言う常連さんとは、連絡先も交換してるらしくてね。サエラのOKが出れば、すぐにでも連絡を取ってくれるって言ったよ。運が良ければ、今夜中にも手配が出来るかもしれないね」
リユートは携帯電話を取り出すと、すぐルイに連絡を入れた。

【4】仲介役

某日、夕方。マラザ内『Town of darkness』店内に、一人の男が入ってきた。

「悪いな」

ルイはカウンターから、男に軽く手を挙げて合図した。

「いいさ。どうせ暇だったからね」

男は真っ直ぐルイの前に向かうと、カウンター席に腰を下ろした。彼がルイの言う、ダンを知る常連客である。

「で、話って言うのは？」

「ああ、殺し屋ダンのことだ」

「誰かの仲介？」

男の問いに、ルイは頷いた。

「俺の知り合いが、殺し屋に命を狙われていてな。彼は自力で殺し屋と戦えるような、強い戦力を持っていない。彼を助けるには、狙っている殺し屋を倒すしかないんだ。だから『殺し屋の殺し屋』と呼ばれるダンに依頼を、と思ってるな」

「へえ……。それでダンについての情報を、俺から聞こうと思ったわけか」

「頼めるか？」

グラスにウイスキーを注ぎながら、ルイが問う。

「もちろんさ。ルイの頼みとなれば、出来るだけ手を貸したい。いつも良い酒を飲ませてもらってるしね」

「居場所と連絡方法………それを知ってる人間、知り合いにいないか？ お前自身は、ダンと同じ町の出身って言うだけで、詳しいことは知らないんだろう？ いつ命を狙ってくるか分からないから、なるべく早く連絡が取れるようにもしたいんだが………」

ルイに差し出されたグラスをカラカラと鳴らしながら、男は首を

縦に振った。

「僕の知り合いに、殺し屋の依頼を受けてる技術屋がいるんだ。そいつなら、ダンとも多少の交流があると思う。聞いてみるよ、今からでも」

「ありがとう、助かる」

ルイが礼を言うと、男は頷いて携帯を取り出した。知り合いに電話をかけ、話し始める。ルイはその様子を黙って見ていた。

その電話は、数分で終わった。男は携帯をしまい、ルイを見上げる。

「バッチリ。ダンの連絡先、知ってるらしい。この店に来てもらうように言っておいてくれるって。」

ダンがいつ来れるか分かったら、僕に連絡が来るようになってる。そしたらすぐ、ルイに連絡するよ。なるべく早くって言ったら、今夜にも連絡を取ってくれるって。運が良ければ、今夜中にもダンと会えるかも」

「そうか。世話になるな」

「お安い御用だよ」

男は微笑むと、ウイスキーを飲み干した。

「礼と言っちゃ何だが、今日は好きなものを何でも頼んでくれ。おごりだ」

「いいの？　じゃあ遠慮なく。今まで飲んだことの無いものをもらおうかな」

男の言葉に、ルイは頷いた。そして、お勧めの酒をいくつかチョイスする。その中から気になるものを、順に男に出していった。

「うん、どれも美味しいね」

「自信を持って仕入れてるからな」

さらに次の酒を出しながら、ルイは自身ありげに答えた。

酒を飲みながら世間話をしていると、いつの間にか二時間が経過していた。男は時計に目をやると、グラスに残っていた酒を飲み干した。

「それじゃあ、そろそろ帰るとするよ。ごちそうさま」

「ああ、また連絡頼む」

ルイがそう言ったとき、小さく電子音が聞こえた。男が持っている携帯電話の着信である。男はすぐに電話に出た。

「もしもし……ああそうだ、『Town of darkness』ってバー。……今夜？ 依頼主も？ ……分かった、聞いてみるから待って」

男は一旦、電話を保留した。そしてルイを見上げる。

「夜十一時頃、ダンがここに来れるらしい。ただ、依頼主から直接じゃないと、話を聞かないらしい。依頼主、その時間にここに来れる？」

ルイは考えた。サエラは直接、ダンと会話をするだろうか。でもダンは、まだ依頼主が誰かを知らない。もしサエラが駄目だと言えば、自分が依頼主だと言うことにしてしまえばいいだろう。そう思ったルイは、男に向かって頷いた。

「……ああ、大丈夫だ。今夜、十一時に」

男も頷くと、再び電話へと戻った。そして簡単な会話を終え、電話を切る。

「言ったとおり、十一時頃、ダンにこの店に行くように伝えてくれるって。早く進みそうだね」

「本当に助かった。ありがとう」

「いやいや、僕の方こそ。たくさんごちそうになったしね。また何かあったら、いつでも頼ってくれよ」

男は立ち上がると、もう一度ルイに礼を言って、店を出て行った。それを見送ると、ルイはすぐにサエラに連絡を入れた。

【5】再会と依頼

時計の針が二十三時を差す頃、サエラは臨時閉店となったルイの店に顔を出した。突然のことに動揺したが、ここでダンから逃げるわけにはいかない。そう思い、自らダンと話しをすることに了解した。

「まだ来てないようね」

「ああ、すぐに来るだろう」

カウンターに歩み寄るサエラに、ルイは焼酎を差し出した。席に着き、グラスを取るサエラ。

「念のために、銃は持っておくわ」

「大丈夫さ。お前はもう殺し屋じゃない。奴がお前を狙う理由はなくなっただから」

ルイの言葉を頭の上で聞きながら、サエラはグラスに口を付けた。
「来たようね」

グラスを置き、サエラが呟く。重苦しい空気が、外から店内に流れ込んできた。サエラが振り向くのと同時に、キィとドアが開く。

「やっぱりお前だったか」

二百センチを超える長身、黒いトレンチコート。

「久しぶりね。……ダン」

サエラは立ち上がり、ダンの方を向いた。ケイトが死んだ事故以来、二人は顔を合わせていない。久々の再会に、サエラは緊張の面持ちだ。

「外まで殺気が伝わってきた。それが依頼主の出す空気か？」

「それはこっちの台詞よ。その重苦しい空気、外から伝わってきたわ」

ダンはゆっくりと、店内に足を踏み入れた。

「感じた殺気、お前のような気がした。まさか、お前から依頼を受

けることになるとは」

「そうね。私もまさか、あなたに依頼をする羽目になるとは思わなかったわ」

カウンターまで歩み寄ってきたダンに、ルイは「何か飲むか？」と尋ねた。ダンには首を横に振ると、席に着くことなくルイを見た。

「早速、依頼を聞きたいんだが。俺は常に、依頼主とサシで話をしている。話が漏れると困るからな。悪いがマスター、席を外してくれ」

「……そうか。じゃあ俺は、二階の部屋に戻る。あとは二人で話してくれ」

ルイは答えると、サエラの目を見て頷いた。サエラも頷く。ルイは適当に洗い場を片付けると、カウンターの奥へと消えていった。

「さて、話を聞こうか」

ダンにはカウンターの一席に腰掛けた。一つ席を空けて、サエラも腰掛ける。

「俺に依頼をしてくるということは、俺が『殺し屋の殺し屋』だと言ったことも知ったんだろう」

「ええ、聞いたわ。だからこそ、あなたを呼んだ」

「で、殺して欲しいのは誰だ？」

ダンが問うと、サエラは頷いた。

「私が殺して欲しいのは マハト」

サエラの口から出た名前に、ダンには目を伏せて黙った。

「知ってるわよね、マハト。殺し屋ですら恐れている、殺人鬼のよくな男」

「もちろん知っている。……何故、マハトの命を？」

ダンの問いに、サエラは真実を伝えるべきか迷った。だが結局、リユートのことは伏せておくことにした。

「悪いけど、それは言えないわ。詳しい理由まで話さなきゃいけないなんて義務、依頼者には無いでしょう?」

「そうだな」

ダンが顔を上げると、サエラの方を見た。

「……分かった。その依頼、引き受けよう」

その言葉に、サエラは安心した。だがすぐに、ダンが言葉を続けた。

「ただし、条件がある」

「条件……?」

眉をひそめ、ダンを見上げるサエラ。

「そうだ。条件を呑むなら、その依頼を受けてやる」

「条件って、依頼料について?」

サエラが問うと、ダンは首を横に振った。

「金には興味ない。依頼料は、どんな依頼でも統一してもらっている。俺の言う条件は 決着だ」

サエラの額に、汗が滲む。

「お前は俺と会った最後、『いずれ命をもらおう』と言った。つまり、いずれ俺を倒すつもりだったんだろう。依頼が完了したら、その決着を付けるんだ。俺とお前の、命をかけた勝負」

「命を、かけた……」

俯くサエラ。つまりダンの言う条件とは、ダンがマハトを倒したら、その後サエラと命をかけた戦いをする、というものだ。

だがそれは、あまりにも不利なもの。サエラにはマハトが倒せないため、ダンを雇うのだ。そのダンがマハトを倒したとすれば、ダンの実力はマハト以上のものと言うことになる。

そんな相手と命をかけて戦う サエラの負けは、ほぼ確定してしまうようなものだ。命と引き換えに、ダンを雇う そんな表現が正しくなるかもしれないのである。

【6】命をかけた取引

サエラは黙り込んだままだ。その横で、ダンがタバコに火をつける。

「お前の考えていることは分かる。命と引き換えになるかもしれない、そんな条件を出されても、マハトを倒したいか？ それだけの意志があれば、依頼を受けよう。」

だが、一つだけ言っておく。俺はマハトの真の実力を知らない。俺でも敵わない相手だったとしたら……そのときはお終いだ」
思わぬ弱気な発言に、サエラは顔を上げた。

「あなたみたいな殺し屋も、そんなふうと思うのね」
「マハトのことは、噂にしか知らないからな。依頼を受けるとなれば、これから調査も必要になる」

煙を吐き出しながら答えるダン。
「でも私が戦うより、アンタの方がきつと……」

呟くように言葉を濁し、サエラはじつと正面を見つめた。何かを
考え込むように。

「そう。悔しいけど、私よりもあなたの方が、マハトと対等に戦えるわ。その後のことは、マハトが死んでから考えればいい。……お願いするわ、マハト殺し」

「そうか、分かった。依頼を引き受けよう。それにしても……そんなにマハトを殺したいのか？ 自分の命を失うかもしれないというのに」

早々にタバコを揉み消すダンに、サエラは頷いた。

「どうしても、奴を倒さなくちゃいけない。例え私の命が危うくなっても」

「意志は固いみたいだな」

「ええ。そうじゃなきゃ、あなたに依頼をしようなんて思わないわ。」

自分で何とかしようとしてたわよ。殺し屋としての実力は、辞めたからって衰えたりしない。それより、私はもう依頼人になったんだから、言うとおりにしてもらおうわ」

サエラが言うと、ダンは「聞こう」と腕を組んだ。

「時間が無いの。少しでも早く、マハトと決着を付けてもらいたい。あなたは私を狙っていたとき、すぐに殺そうと接触してこなかったわね？ あんなふうにゆっくりされていたら困る。すぐにでも行動を開始して」

「……何故、そんなに急ぐ？」

「それは、マハトの命を狙う理由と関係しているから言えないわ。とにかくあなたは、少しでも早くマハトと接触して、勝負を仕掛けてちょうだい」

サエラの真剣な訴えに、ダンは頷いた。

「分かった。早速、今夜から調査に出よう。すぐ殺すのは、俺のスタイルにそぐわないんだが。この際、仕方あるまい」

「どうしてすぐに殺さないの？ こんなことを言うのもなんだけど、あなたが私を狙っていたとき、殺すチャンスがいくらでもあったはず。それでもあなたは、すぐに私を殺そうとはしなかった」

「つまらないからだ、すぐに殺してしまつたら。俺が狙うのは殺し屋。つまり、自分と同属の人間になる。そいつがどれだけの實力を持っているか。俺に反抗してくるか。そいつの持つオーラ。同じ殺し屋として、興味を持つのは当たり前だ。中には興味深い人間もいるからな。……お前みたいに」

最後の言葉に、サエラは首を傾げた。

「私？」

「そつだ。お前の持つオーラ、そして素早さ。なかなかのものだと思つた。おそらく、この町では頂点に立てるくらいの実力があるだ

ろう。ちっぽけな会社で働くなんて、もったいないことだな」

ダンなりの褒め言葉だろう。

「ちっぽけ？ ハーツは世界を股にかける貿易会社よ。入りたくても面接に受からない人間が、何百といるのに……」

「殺し屋の世界に比べたら、それは小さな世界だ。頂点に立つ人間に従い、皆が同じように動く。そんな小さな世界で、一体何を残せるといふのか。殺しの世界は違う。皆が頂点を争い求め、命をかけたとして生きる術を見に付けていく」

「それも……一理あるかもしれないわね」

溜め息混じりに答えるサエラ。

「でも私は、殺し屋である人生を捨てた」

「そうだな。それについて、とやかく言おうとは思わない。ただ、俺の意見を言ったままでだ」

言い終わると、ダンは立ち上がった。

「早速行動に移ることにしよう。すぐにもマハトに接触できるように試みる。お前は普段どおり、生活していればいい。このバーを仲介して、連絡を取る」

「分かったわ。いい知らせを待ってる。……悔しいけど、あなたしか頼れる人間はいない」

サエラも立ち上がり、ドアに向かうダンの背中を見つめた。振り向くことなく、ダンはドアを開ける。

「じゃあ、また会おう」

夜に溶けていくように、ダンの姿は暗闇へと消えた。

〈第四段階〉【1】偽りの報告

「どうだったんだ？」

カウンターに戻ってきたルイは、早速サエラに結果を尋ねた。

依頼は引き受けてもらったものの、それが成功すれば、サエラとダンが命をかけた勝負をすることになる。それはつまり、サエラの死を意味するのとイコールに近いのだ。だがそれがリユートに伝われば、彼は依頼を取り消すだろう。そう考えたサエラは、依頼の詳細を胸のうちに秘めておくことにした。

「引き受けてくれたわ。なるべく早くお願いって言ったら、今夜から行動してくれるって」

「そうか。やはり仕事となると、相手が誰であつてもきちんに対応してくれるんだな」

「……そうね」

ルイはグラスを用意すると、「何か飲むか？」とサエラに尋ねた。サエラはいつもどおり、お気に入りの焼酎を注文する。

「ダン、マハトを倒せそうだったか？」

「分からないわ。ダン自身、マハトの実力については詳しく知らなかった。『俺でも敵わない相手だったら……』なんて、弱気な発言までしてたわよ」

「意外だな、あの男からそんな発言」

そう言いながら、ルイはサエラにグラスを差し出した。

「でも今は、アイツに賭けるしかないものね。もし失敗したら……私が出て行くことになるかもしれないけれど」

伏し目がちに、サエラはグラスに手を伸ばした。

「信じよう、奴を。俺たちに出来るのは、それだけだ。」

リユ―

トには連絡したのか？」

「まだよ。今日は遅いし、もう眠ってるかもしれないから、明日の

朝に伝えておくわ」

「明日も朝から仕事だったんだよな。泊まっっていくか?」

ルイが問うと、サエラは首を横に振った。

「大丈夫、帰るわ。家からの方が、ハーツには近いし」

焼酎を飲み干し、立ち上がるサエラ。

「何か動きがあつたら連絡するわ」

「分かった。お前も気をつけるよ?」

サエラは頷くと、「じゃ、おやすみ」と声をかけて店を後にした。

翌朝、出勤したサエラは、社長室でリユートと顔を合わせた。そこで、ルイにしたのと同じ説明をする。

「良かった、引き受けてくれて」

「そうね。確実に安心できるわけじゃないけど、大きく前進した感じよ」

嬉しそうに笑うリユート。サエラは複雑な気分だったが、リユートに合わせて微笑んだ。

「アンタ自身、何も変わった事は無い?」

「うん、大丈夫。会社の行き帰りにはボディガードを付けているし、家の周りも完全セキュリティを整えたから」

「まあ、何も無いより安心ね」

テーブルに置かれたコーヒーマグのマグカップを取り、サエラは溜め息をついた。

「どうしたの?」

「何でもないわ。アンタは自分の身を守ることだけ考えてなさい。きっと、ダンにはマハトを倒す」

サエラは頷くと、マグカップに口を付けた。

その日の業務は通常通りに進められた。リユートの身に何か起こ

るような気配は無い。もつと早いうちに何らかの接触をしてくるだろうと思っていたサエラは、あまりに普通に過ぎた一日に、少し拍子抜けしてしまった。

「何の気配も無いわね……。本当に、マハトはアンタの命を狙ってるのかしら」

「ここまでできて勘違いだったなんて、ある意味恥ずかしいよ。ダンに依頼までして……」

制服のジャケットを脱いでハンガーに掛けながら、リュートは溜め息をついた。

「油断させるつもりかしら。私たちが周りを警戒してる気配、マハトが感じ取ってるのかもしれない」

「そうなのかなあ。なんか僕、命を狙われてることに対する恐怖感が減ってきてるよ」

リュートは社長室のデスクにつくと、一通りの書類に目を通し、パソコンの電源を落とした。今日の業務は、これで完了である。

「まあ、遅ければその方がありがたいわよね。ダンにとっては。奴もマハトの情報集めからスタートしてるんだもの」

「それもそうだよな。さ、帰ろうか」

立ち上がったリュートは、デスクの横に置いておいた鞆を手にした。サエラもハンドバッグを手に、社長室から出る支度をする。

と、そのときだ。サエラの携帯の着信音が鳴った。液晶には「ルイ」と出ている。サエラはすぐ、電話に出た。

『今、ある人間から連絡があつたんだが。……まずいことになった』
ルイの声は、緊張感としてサエラに伝わった。

【2】急展開

『すぐここに行つて欲しい』 そのルイの言葉で、ハーツを後にしたサエラは、マラザの奥へと足を進めていた。リユートも一緒に行くと言つたが、マラザの町に入るのは危険だということ、サエラが無理やり帰らせた。

ルイが行けと言つた場所は、バスも通らない、マラザの中でも最も闇に包まれた場所だ。サエラですら、滅多に足を踏み入れることは無い。車を持っていないサエラにとって、交通手段が無いのも原因なのだが。目的の場所までは、歩くと三十分近くかかってしまうのだ。

目的の場所は、建物の表札に「代行運転会社」と書かれていた。だがそれは建前だと、ルイから聞いている。本当は 。
「すみません」

ドアを開け、サエラは室内を見回した。事務所になっている。数台のデスク、パソコン、電話。建前としての商売である代行運転を受けるための事務所だろう。その中の一つのデスクに、眼鏡をかけたスーツの男性が座っている。彼はサエラに気付くと、席を立った。
「いらつしゃいませ。代行運転の依頼ですか？」

「いえ。面会です」
「……そうでしたか。では、この建物の裏に回ってください。扉のロックを解除しておきます」

男の指示に従い、サエラは店から出た。そして裏側に回り、そこにあつた扉を開ける。目の前には廊下が広がっており、サイドにくつかドアが並んでいた。入り口には、受付のような小さな小窓がある。中にいる人間の顔は見えず、胸元の辺りだけが小窓から覗いていた。

「どなた様のご面会で？」

女性の声。どこか暗く、湿っぽい声だ。

「ダンという男の面会に」

「一番奥のお部屋です」

サエラは廊下を歩き、一番奥の部屋に向かった。奥と言っても、扉は計三つだが。

サエラがやってきたこの場所は、マラザで唯一の「裏病院」である。殺し屋、テロ 訳あつて普通の病院に搬送出来ない人間を、かくまいながら手当てする施設だ。病院と言っても、闇医者が一人で運営しており、その存在はほとんど知られていない。サエラ自身、ルイから聞くまで存在を知らなかった。

部屋の前に来ると、サエラは扉をノックした。そして扉を開き、中へ入る。中は狭く薄暗くなっており、白いベッドだけが妙な鮮やかさを醸していた。

「アンタ」

サエラは言葉に困った。ベッドに横たわっているダン。その表情から、苦痛を感じ取れる。サエラはベッド横のパイプ椅子に腰掛け、言葉を続けた。

「……やられたの？」

「あと数ミリずれていたら、心臓を突き破っていた」

「撃たれたのね、マハトに。あなた特有の殺気が、全く感じられないわ」

サエラの言葉に、ダンは頷いた。そして身体を起こそうとする。

だがサエラは、それを押さえた。

「いいわ、寝てて。それより、マハトと撃ち合いでもしたの？ そんな痛手を負うなんて」

「いや……背後から突然やられたんだ。俺としたことが 近付いてくる気配すら、感じ取ることが出来なかった。奴には何のオーラも無い。奇妙なほどに」

サエラは絶句した。

初めてダンに後をつけられたとき、その殺気は、サエラにももの凄い勢いで伝わった。そしてサエラの殺気も、ダンに伝わる。だがマハトは、気配を消すことが出来るらしい。近付いていることが分からないのは、マハトがオーラを消しているからだろう。

そう思うと、サエラの肌に鳥肌が立った。今までリユートが狙われているような気配は無かったが、もしかしたらマハトが近付いていた可能性もあるのだ。サエラもリユートも、気付いていないうちに。

「……姿は、見たの？」

「ああ、後ろ姿だが。奴に撃たれた後、すぐに振り返った。そのときにな。だが俺も、撃たれて視界がはつきりしなかった。何とか銃を放ったが、当たったのは足。痛手を負ったにしても、大したものにはならないだろう」

「でも、あなたはもう戦えない」

サエラの言葉に、ダンは「何故だ」と眉をひそめた。

「確かに、今すぐ反撃に出ることは不可能だ。でも傷口さえ塞がれば、また俺は奴に挑む。このまま引き下がったら、依頼を引き受けた意味がない。依頼を受けた以上、俺は命をかけて奴と戦わなければならぬんだ」

そう言うダンの目には、殺し屋としての意地とプライドが感じられる。何としてでもマハトを倒す。そんな思いが込められているであろう、強い目つきだった。

【3】自らの手で

ダンの力強い目とは反対に、サエラは焦りを隠せなかった。少しでも早く手を打たなければ、リユートの命がさらに危なくなるのである。

「だけど、その傷口が塞がるのはいつなの？ 心臓付近まで弾が迫ったって言うのに……そう簡単に塞がるわけじゃないじゃない。アンタの回復を待ってたら、リユートが殺される！」

声を荒げるサエラに、ダンは落ち着いて言葉を続けた。

「ケイトの息子が関係してたのか」

「！」

ハツとするサエラ。感情的になり、ついリユートのことを口走ってしまったのだった。

「どうやら、話を聞く必要があるそうだな」

「……分かった、話すわよ、最初から」

サエラは渋々、依頼をした経緯を話すことにした。

「実は、誰かがマハトに、リユート殺害を依頼したらしいの。リユートには、殺し屋と戦えるほどの戦力は無い。」

だからと言って、私がマハトと対等に戦うのは不可能に近い。だから、あなたに依頼することにしたのよ。『殺し屋の殺し屋』
そう言われている、あなたに。」

あなたと初めて対峙したとき、今までの誰とも比べられないくらいの脅威を感じた。この私が、初めて負けるかもしれないと思った。悔しいけど、あなたの実力は私より格段に上。そんなあなたなら、マハトを倒してくれると思った。でも……あなたより、マハトの方が上だったみたいね」

話し終わると、サエラは溜め息をついた。ダンは何も言わず、黙っている。

「もう、残された手段は無いわ。私が戦うことはできる。でも、あなたに倒せなかった人間を、私に倒せる自信は無い。奇跡でも起こらない限りは」

弱気な発言をするサエラに、ダンは口を開いた。

「さっきも言ったが、俺は奴の足を撃った。弾は右脛脛ぶくろひはねを貫いている。奴自身、本調子では動けないだろう。今すぐにリユートを襲ってくるとも思えない。そう思うと、奴を倒せる希望が無くもない。もちろん俺より早く回復することは間違いないが、それまでリユートを守ることなら……お前にも、きっとできる。いや、お前が守るべきだろう」

ダンの発言に、サエラは眉をひそめた。

「どうしてそんなことが言えるの？ 私が守るべき、だなんて」

「大事なものは、自分で守るに越したこと無い」

「大事なものって……」

サエラはダンから顔をそらした。

「回復したら、必ずマハトを倒して。それまでは、何とか私が時間稼ぎをするから」

「マハトが持っているのは、四十五口径の銃だ。女にとっては、相応な威力がある。そして何より、奴は気配を殺して近付いてくる。

気をつけていても、気付けないかもしれない。すぐに銃を取り出せるよう、ちゃんと考えておくんだ」

「分かったわ。あなたが動けるようになるまで……依頼は一時中断と言うことで」

言い終わると、サエラは立ち上がった。

「また様子を伺いに来るわ。それじゃあ」

ベッドに背を向けると、サエラは病室を出た。そして裏口を抜け、通りに入る。

(ダンでさえ、気配を感じ取れなかった男……。どう足掻いたって、私の倒せる相手じゃない。それでも 時間稼ぎなら、私にだってできるはず。今はとにかく、ダンの回復を待たなくちゃ)
考えながら、サエラは歩いて自宅まで向かった。

翌日から、サエラは常に、リユートの傍にすることにした。ダンがやられたこと、マハトが足を怪我したこと、ダンの回復までサエラがリユートを守るということ。朝の社長室で全てをリユートに話し、サエラは彼の傍から離れないことにしたのだ。

「アンタ、今は一人暮らしなんでしょ？」

「うん、母さんはお手伝いさんを雇うのを嫌がっていたから……僕も特に困ってるわけじゃないし、結局は一人で住んでるよ」

苦笑するリユートに、サエラは一つの提案をすることにした。

「今日からしばらく、アンタの家に居候させてくれる？ アンタを一人にしておくのは、ダンに頼れない今、危険すぎるわ」

「い、居候？ サエラが僕の家には？」

「ま、タダでとは言わないわ。住まわせてもらうわけだし、家事くらいはするわよ」

サエラの言葉に、リユートは動揺している。

「そんなことじゃなくて。僕、一人暮らしなんだよ？そこに、サエラが住むって言うのか？」

「何か問題でも？」

きょとんとしているサエラ。リユートは頬を赤らめつつ、首を横に振った。

「ううん、何でもなし。大丈夫だよ」

「じゃあ今日から早速。悪いけど、荷物を取りに行くから、帰りはマラザまで付き合っただよ」

続・暗黒ノ町 ~ R e w a r ~

一人話を進めるサエラに、リユートは戸惑いながらも頷いた。

【4】リユート宅

仕事を終えたサエラとリユートは、車でマラザに向かった。リユートが会社に置いてある車だ。

サエラの自宅前に車を止めると、サエラは車から降りた。リユートも一緒に下りる。リユート一人で車にいさせるわけにはいかない。二人で家の中に入った。サエラはリユートを待たし、泊まりに必要な支度を整えた。何日間の居候になるかは分からないが、リユートの車を使えばいつでも来れる距離だから、必要最低限のものだけでいいだろう。

サエラは自分の腰ほどまでの高さのキャリーバッグに荷物をまとめ、リユートと一緒に車に戻った。

「必要最低限と言いつつ、結構な量の荷物だね」

トランクに荷物を積みながら、重そうに言うリユート。

「これでも女だからね。まとめてもこのくらいの量になっちゃうのよ」

両手を腰にあてながら、サエラは口を尖らせた。

「さ、アンタの家に向かうわよ。夕食の材料は、何かある？」

「うーん、野菜はある程度あったんだけど、メインになりそうな材料は無かったかも」

考えながら言うリユートに、サエラは「分かったわ」と答えた。

「じゃあ途中、どこかで材料を買って帰ればいいわね」

リユートはそれに合意し、支度へ向かう途中のショッピングセンターに車を走らせた。

ジュエル市内に入り、街がひらけ、人通りの多い街中。その中でかかと構えるショッピングセンターに車を止めると、二人は降りて中へ入った。そして真っ直ぐ、食品売り場に向かう。

サエラがショッピングカゴを持つと、リユートそれを取った。

「僕が持つよ、重いし」

「重い？ 私を普通の女と一緒にしないでよね」

「そう言う意味じゃなくて。こういうのは、男の僕に任せておけばいいんだ」

先を歩き出したリユートの背中を、サエラは不機嫌そうに見つめた。

それから夕食の材料を揃えると、車は再びリユートの自宅へと向かった。約十分ほどで、自宅に到着する。

「ここが僕の家だ」

運転しながら、リユートは目の前に広がる邸宅を顎でしゃくった。周りは塀に囲まれ、家と言うより一つの街のようだ。それを象徴するかのように、辺りに他の民家は無い。辺り一体が、自分の土地なのである。

「この……だだっ広いの？」

啞然とするサエラ。車は門を抜け、庭を進んでいく。庭の奥にあるガレージに車を入れると、リユートは車を降りた。サエラもそれに続く。

「一人で住むには、あまりに広すぎるわね」

「まあね。使っていない部屋の方が多いよ。掃除も行き届いてないし」
食材の入った袋を抱えながら、リユートはサエラを玄関まで案内した。セキュリティシステムによる厳重なロックを解除し、玄関を開ける。

「自宅だっつ言うのに、会社みたいな作りね」

「うん。母さんは用心深かったから」

犯罪に手を染めていた、リユートの母でありハーツ社長でもあったケイト。彼女なら、これくらい厳重なロックをするだろう。サエラは心の中で思った。

リユートはキッチンに入ると、食材の入った袋をテーブルに下ろした。

「もう七時だし、夕食の準備しようか？」

「そうね。じゃあ、アンタは適当にゆっくりしてて」

「え？ サエラ一人でやるの？」

リユートの言葉に、サエラは眉を寄せた。

「私が作るものじゃ不満？」

「いや、そういうことじゃなくて！ 作って………くれるの？」

「くれる、って何よ。言ったでしょ、居候させてもらう代わりに、家事は任せてって」

サエラは得意げに言うと、リユートを無視して手を洗い始めた。その後ろ姿を眺めながら、リユートはニコニコしている。

「サエラの手作りかあ………楽しみ」

「何か言った？」

リユートの呟きに、サエラが振り返る。

「いや、何でもないよ。じゃあ、よろしくお願いします」

サエラに会釈すると、リユートはキッチンを後にした。廊下に出て、二階にある自室へと向かう階段を上る。階段を上りきり、廊下を右に歩いた突き当りがリユートの部屋だ。左右に客間やクローゼットルームがあり、その合間に窓が並んでいる。

ガシャン！

「！」

突然だった。廊下を歩いていたリユートに、ガラスの破片が降り注ぐ。その音 廊下の窓ガラスが割れた音は、一階のキッチンにいるサエラの耳にも届いた。

「何の音！？」

掴んだばかりの包丁を置くことも忘れ、すぐに音のした方、二階への階段を駆け上がる。廊下を見渡すと、そこに倒れているリユートが目に入った。

「リユート！」

カシャンと包丁を落とす、サエラは倒れているリユートへと駆け寄った。窓ガラスの破片が、仰向けに倒れているリユートに降りかかっている。だが、それだけではない。リユートの右肩からは、血が流れ出していたのだった。

【5】マハト

「リユート、しっかりして！」

叫びながら、サエラはリユートの右肩を押さえた。ポケットからハンカチを取り出し、すぐに止血を施す。幸い傷口は浅く、命に關わるようなものではなかった。意識を失っているが、そのうち取り戻すだろう。

「銃、か……」

止血を終えると、サエラは割れた窓ガラスを見上げた。銃弾が当たり、砕け散った窓。弾はリユートの肩を掠め、粉々になった窓ガラスはリユートへと降り注いだようだ。

「マハトに違いない……油断したわ。でも、リユートの家に来たのは正解だったみたいね」

割れた窓を睨みつけ、サエラは憎らしそうに呟いた。そのときだ。サエラは背後に妙な殺気を感じ、慌てて振り返った。

「肩を掠っただけか。運のいい奴」

不敵な笑みを浮かべ、立ちはだかる男。

「お前は……マハト!？」

「正解」

茶色く立てた髪、白い肌に、見たことも無いようなブルーの瞳。

この国の人間の瞳の色はグレーだ。ブルーの瞳など、見たことがない。異国の人間なのだろうか。

サエラは倒れているリユートをかばうように、マハトの前に立った。

「何故ここに！ 大体、どうやって入ってきた!？」

「こんなちつぽけなセキュリティで、家を守ったつもり？ オレ様も随分、見縊みくびられたもんだ」

壊れたセキュリティ機械をちらつかせ、それを廊下に投げ捨て

るマハト。

「オレ様？ 馬鹿じゃないの？ 調子に乗らないで」

マハトを睨みつけながら、サエラはショートパンツのポケットから銃を抜いた。

「へえ、ワルサー P P K か。女にしては重い銃を使うんだね、古そうだけど」

「これはね、私の能力を買ってくれた男から譲り受けたの。この銃で、私は多くの人間を殺してきた。アンタもそのうちの一人にしてあげる」

サエラはマハトに向け、真っ直ぐ銃を構えた。だがマハトは、表情一つ変えることなく、銃すら構えない。

「ふっ、馬鹿なのはどっちかな。君みたいな甘っちょろい女に、オレ様を殺せるとでも？」

「甘っちょろい？ 勝手なこと言っているのも今のうちよ」

引き金が引かれる。サエラの構えていた銃から、一発の弾丸が飛び出した。

「……どこ見て撃ってんの？」

「そんな」

数メートルの距離、真正面に立つマハト。間違いなく正面に向けて撃ったのだが、サエラの撃った弾は、廊下の奥へと消えている。一体、どうやって避けたというのか。サエラの目にも止まらぬ速さで、瞬時に弾を避けたのか。

「オレ様は殺し屋の頂点に立った男。君みたいに、志半ばで中途半端に辞めた殺し屋とは格が違うんだよね」

「どうして私のことを！？」

「知ってるよ？ 元殺し屋、サエラさん」

マハトはサエラの正体を知っている。サエラの額に、冷や汗が滲む。

「君も馬鹿だよ。殺し屋やってれば、マラザでは頂点に立てたか

もしれないのに。そんな男のために、人生を捨てちゃって」

倒れているリユートを、マハトは顎でしゃくった。

「殺し屋をしてた君が、男を守る？ 情にほだされた殺し屋ほど醜いものはないね。恋愛ごっこなら、そんな奴じゃなくて、オレ様が相手してやってもいいよ？ 君、それなりに綺麗な顔してるしね」

「黙れ！」

再び引き金を引くサエラ。だが何事もなかったかのように、マハトはそこに立っている。

「無駄だよ。オレ様には、掠り傷一つ付けれやしない。君はもう殺し屋じゃないし。実力も、随分と落ちてるようだしね。オレ様にしちゃあ、殺しがいがないけど」

馬鹿にしたようなマハトの瞳を、サエラはじっと見据えた。吸い込まれそうな、ブルーの瞳だ。殺人鬼とまで噂される男が、どうしてこんなに通るような眼をしているのだろう。

「不思議かい？ この青い瞳が。 オレ様の母親、異国の人間だったらしいんだよな。オレ様と同じ、青い瞳をしていた。

ガキの頃、オレ様はこの青い瞳のせいで、酷いイジメにあつてきた。『気持ち悪い』、『宇宙人だ』……そうやってクラスで除け者にされ、ガキだったオレ様の心は荒んでいったさ。その心は、次第に母親を恨み始めた。青い瞳をした母親。この女のせいで、オレ様には友達一人すらできなかった。こんな女、母親じゃない。息子の心の痛みを理解してない。

そして気が付いたら、オレ様はこの手で母親を殺めていた。それが、オレ様が殺し屋になったきっかけだ。人を殺すことの快感を知ってしまったんだよ。自分の母親を殺すことだな！」

【6】依頼主？

目の前で笑い続けているマハト。しばらく黙っていたサエラだったが、やがてフツと笑みを漏らした。

「アンタ、本当に馬鹿の中の馬鹿みたいね。いじめられたことを、母親のせいにしてんじゃないわよ」

「何とでも言えば？ あの女は、もうこの世にいないんだし。関係ないね」

「最低。人間としての心つてものが無いわね、アンタには」
鋭くマハトを睨みつけるサエラ。

「人間としての心？ じゃあ聞くけど、殺し屋だった頃の君に、その心があつたつて言うのかい？ 殺し屋だった頃の君には、そんな心など無かつた。その男に惹かれ始めて、殺し屋としての信念を失つていっただけの話じゃないか。」

馬鹿なのは君。殺し屋にそんな心など必要ないんだよ。逆に言えば、人間としての心が芽生えた殺し屋なんて、殺し屋じゃない。君は殺し屋を辞めたんじゃないやなくて、殺し屋である資格を失っただけのことさ」

マハトは笑いをこらえるような様子で語った。本気で馬鹿にされ、サエラの怒りが徐々に増していく。

「黙って聞いてりゃ、好き放題言つて……。アンタ、本気で死にたいみたいね」

「強がっても、銃を握る手は震えてるじゃないか。オレ様の威圧感に、恐怖を感じてるんだろ？」

額に浮かぶ冷や汗、小刻みに震える手。マハトの持つオーラが、サエラ感覚を鈍らす。

「さて……。オレ様は忙しい男だからな、いつまでも君を相手にし

てる暇は無い。死んでもらうよ」

マハトは胸ポケットから、その体格にふさわしい大きな銃を取り出した。

「……待つて」

小さく呟くサエラ。

「命乞いか？ はっ、笑つちまうね！ そんなに命が惜しいのか。

そうだね……じゃあ土下座して？ 『殺さないで、マハト様』って

そしたら考えてあげてもいいよ？ ほら、早く！」

声を上げて笑うマハトを、サエラは睨みつけた。

「命乞いなんてするわけないでしょ。 アンタの依頼主。 リュー

ト殺害を依頼した人間は誰？」

「は？ この期に及んで、そんなことが聞きたいの？ 君も殺し屋

だったんだ、分かるだろ？ 秘密厳守。聞かれただけで、そう簡単

に教えられるわけ無いじゃないか」

「へえ、意外ね。 アンタ、依頼主も簡単に裏切つて殺しちゃうつて

聞いたけど？ 殺人鬼とまで呼ばれる所以はそこにあるんじゃない

の？」

サエラの問いかけに、マハトは一瞬黙った。

「……そうか、まあ確かにね。 オレ様は正直、依頼主なんてどうで

もいい。殺しさえできればね。 どうせ君は死ぬんだ。教えてやって

もいいよ？ ま、聞いたら驚くと思うけど。 “あの女”の執念にね」

「あの女？」

「君もよく知ってるだろ？ その男 リュートの母であり、ハ

ツの社長だったケイト」

ここにきて、どうして死んだケイトの名が出てくるのか。 サエラ

が不思議に思っていると、後ろから呻き声が聞こえた。

「母……さん……」

「リ्यूト!？」

意識を取り戻したらしい。 サエラは慌てて屈むと、リ्यूトの肩

を抱いた。

「目を覚ましたみたいだね。ちょうどいいや。その男にも教えてやるよ。オレ様の依頼について」

マハトは一旦、銃をしまった。サエラは内心ホツとしつつ、依頼が気になり、マハトの話の先を急かした。

「オレ様はハーツ前社長、ケイトの死後から依頼遂行に向けて動き出した。そう、ケイトの息子であるリユートを殺すために。ケイトは富と地位を得るための邪魔になるものを、全て排除しようと考えていた。

ダンって言う殺し屋も雇ってただろう？ 君も命を狙われてたみたいだから知ってるだろうけど。奴も馬鹿だよ、君みたいな甘チヤンを取り逃がすなんて。ま、彼は僕が始末してあげたから安心して？」

マハトは「始末した」と言ったが、ダンが死んだと思い込んでいるのだろうか。殺し屋の頂点に立つ人間が、それに気が付けなかった？ サエラは不思議に思ったが、黙っておくことにした。それより、依頼の真意を確かめなければ。

「ケイトはね、異常なまでにハーツに固執していた。オレ様から見ても、気味が悪いくらいに。周りが見えなかつたんだろうね。

息子まで殺そうとするなんて」

「！」

息を呑むサエラ。サエラの腕に抱かれたまま倒れていたリユートも、あまりに唐突な話に、肩を押えて床に座り込んだ。

「とんでもない女だよ、ケイトは」

マハトは嘲笑うかのように、サエラたちを見下ろした。

〈第五段階〉【1】社長の執念

「ケイトは生前、リユートの他に“真の次期社長候補”を育成していたんだ。リユートよりも遙かに社長にふさわしい、能力と分析力、適応力を持った人間。」

ケイトが死んだ後は、その男に社長職を任せるつもりだった。リユートの存在はフェイクだったのさ。普通なら、こんな能の無い人間を社長になんて出来ないからね。」

オレ様が依頼を受けたのは、ケイトが君　サエラに狙われてからしばらくしてからのこと。『もし自分が死んだら、依頼を遂行して欲しい』とね。その依頼こそが、リユート殺害だったんだよ。」

そこまで言うと、サエラが口を挟んだ。

「どうして？　リユートに社長職を任せられるような実力が無かったにしても、殺すだなんて………実の息子よ？」

マハトは口元を歪めた。

「ハーツの次期社長候補。そいつは今、ハーツ最大のライバル貿易会社の最重要幹部として社長の次の位に君臨している。　そう、奴はケイトが送り込んだスパイだ。ライバル会社の情報を全て横流しにし、そして崩壊させるためのスパイ。」

ケイトが死んだ後、オレ様はリユートを殺し、その罪を奴に擦り付けることを依頼された。ライバル会社の重役が、さらにライバル会社の社長を殺害　奴らの会社は信用を失い、すぐに崩壊する。そして再び、ハーツは世界を股に駆ける、唯一の世界規模貿易会社になるんだ。

次期社長候補はリユート殺害の罪を擦り付けられた後、ハーツが極秘に行っている密輸相手国に密入国して、ジュエルから逃げる予

定だった。国籍も変更し、ジュエルから完全に手を引き、姿を消すつもりだったんだよ。

そしてかりそめの社長をハーツに置き、実権は奴が握る。ハーツはそうして、ケイトの死後も完璧に守られるはずだったのさ。リュートを消すことをきっかけとして、ね。

お子様な息子リュートに全てを任せ切れなかったケイトは、裏でこんなにも手の込んだ茶番を仕込んでいたんだよ。怖いよねえ……ケイトは実の息子ですら、自分の作り上げた会社を守るためのコマの一つとして、死んでもなお利用しようとしたんだから」

絶望したように、放心しているリュート。サエラの心は怒りに満ち溢れていた。

「あの女……自分の息子を何だと思ってるのよ。許せない……」

「許せない？ もう死んでるから復讐も何もできないよ？ 残念だったねえ」

ケラケラと笑うマハトに向けて、サエラはいきなり発砲した。

「おっと、危ない危ない」

「アンタを殺して、ケイトの思惑を崩すこと　それが最大の復讐よ！」

サエラは立ち上がると、再びマハトに銃を向けた。

「だから、言ったでしょ？ 君にオレ様を倒すことなんて不可能だつて。さっさと死んじやつてよね！」

マハトは瞬時に銃を抜くと、サエラに向けて引き金を引いた。サエラは慌てて避けようとしたが、マハトの瞬発力に追いつけなかった。サエラの左頬から、血が飛び散る。

「よく避けたねえ。でも、まぐれは二度無いよ！」

マハトが再び引き金を引こうとしたときだった。突然、別の方向から銃声が鳴り響き、マハトの手にあった銃が弾き飛ばされた。

「生きてたのか……」

マハト振り返った先には、ダンが銃を構えて立っていた。

「この前の仕返しといこうか、マハト」

「……へえ、心臓を撃ち抜いたつもりだったんだけどね。狙いが外れてたか。でも、そんな体で僕と戦えるの？」

「お前だって俺に撃たれた足、痛むみたいじゃないか。重心が傾いてるぞ」

ダンにはマハトの足を顎でしゃくった。

「別に。片足を負傷してるくらいで、アンタに勝つって言う事實は変わらないさ。邪魔したお詫びに、アンタから死ぬんだね！」

マハトは胸ポケットから、別の銃を出した。ダンもそれと同時に引き金を引く。バン、という音が響いた瞬間、ダンが床に崩れ落ちた。そして、そのまま動かなくなった。

「どうして！ 撃つたのはダンのはずなのに！」

サエラが叫ぶ。

「遅い！ 遅いんだよ！ アンタが引き金を引くまでと、オレ様が銃を取り出してから引き金を引く速さ。それが同じじゃ勝てないよ！？」

ダンが倒れている下から、血が流れ出ている。前にマハトから受けた傷の口が開いたのと、撃たれたばかりの傷。最早、瀕死状態だ。このままでは、本当に死んでしまうかもしれない。危険だった。

【2】殺人鬼の最期

意識を失い、血を流し続けているダン。そんなダンにトドメを誘うと、再び銃口をダンに向けるマハト。

「待ちなさい！」

その背中に、サエラが叫んだ。面倒くさそうに、マハトが振り返る。

「何？　もしかして君、以前自分の命を狙ってた男をかばうつもりなの？　これまた笑っちゃうね。　まあいいや、もうコイツは死んだも同然。君からじつくりと、^{なぶ}鬺り殺しにしてあげるよ。」

銃をマハトに向けつつ、サエラの背筋が凍りつく。

「さつきは上手く避けられたからねえ……。顔の中心を狙ったつもりだったんだけど。女の命である顔に穴を空けられ、苦痛に表情を歪める君に、オレ様がさらに穴を空けてやるんだ。全身穴だらけになって、無様に死んでいけばいいんだよ！　殺し屋としての信念を失った君には、お似合いの死に方さ！」

「残忍な……っ！」

頬の傷がひりりと痛むが、そんなことにはかまっていられない。

サエラは必死で、マハトに向けて引き金を引いた。

「無駄無駄！　君みたいな甘チャンに、オレ様を殺せるはず無い！　身の程を知るんだね！」

何度撃つても、掠り傷一つ付けられずに避けられる。

「どうしてよ！　私の狙いは正しいはずなのに！」

「ふっ、君の狙いなんて関係ない！　オレ様の動きが、君の動きより勝っているだけの話さ！」

高らかに笑うマハト。それでもサエラはマハトに向けて発砲し続けたが、しばらくして銃声が止んだ。

「あれれ？」

もしかして弾切れかい？　無駄撃ちだったねえ……

…。じゃ、今度はオレ様が攻撃させてもらおうかな」

サエラの頬を、冷や汗が伝う。このまま自分が殺されたら、リュートも確実に殺される。リュートを死なすわけにはいかない。サエラは混乱しきつた頭でも、何とか平常心を保とうとした。とにかく、マハトの攻撃を避けなければ。サエラはかばうように、床にしゃがみこんだまま放心しているリュートの前に出た。

「ふうん……自分から死にに来るなんて、いい度胸してるね。

あつ、そうだ。よかつたらさ、オレ様の弟子にならない？ そうすれば命だけは助けてあげるよ？ 弟子になったら、その男をオレ様の代わりに殺すんだ。面白いだろ？」

「ふざけないでよ……誰がアンタみたいに腐った奴なんかの
その瞬間、一発の銃声が響いた。 !」

「え ?」

何が起こったか分からず、呆然とするサエラ。

「クソツ、てめえ……」

マハトの口調が荒くなる。その背中には、銃弾の跡があり、血が流れていた。倒れていたダンが、氣力を振り絞り、落とした銃を拾ってマハトに向けたのだ。

「この……死に損ないが！ もう死ね！」

銃弾を受けながらも、マハトは倒れているダンに向けて蹴りを入れようとした。だがそこに、もう一発の銃声が響く。

「撃たれて冷静さを欠いたみたいね。後ろがガラアキよ！」

マハトの背中には、もう一つの銃弾の跡があった。ダンによる不意の攻撃に動揺し背を向け、後方が隙だらけになったマハトに、サエラが撃ちこんだのである。

「てめえら……オレ様に傷を負わせるなんて！ 許せねえ！ 死んで償え！」

「これでも倒れないなんて！」
驚きの声を上げるサエラ。二発も銃弾を食らっていないながら、マハ

トは狂ったようにサエラに襲い掛かった。サエラはもの凄いい力で投げ飛ばされ、正面から壁に全身を打ちつけた。

「ぐっ……!!」

激痛に顔を歪めながら、サエラは床に倒れた。おそらく、衝撃で肋骨が何本か折れてしまっただろう。

「サエラに　!!」

怒りが全身を駆け巡り、リュートは護身用に持っている銃をポケットから出して立ち上がった。

「うわあああ!」

目を瞑り、がむしゃらに発砲するリュート。連なっている銃声の間に、悲鳴のような絶叫が重なる。

「サエラを傷付ける奴は絶対に許さない!　やめろおおっ!」

「リュート!」

サエラは全身の痛みを堪えながら立ち上がると、リュートの腕を掴んだ。銃声が止む。辺りは硝煙で、ボヤがかかったように白く煙っていた。

「　死んでる」

サエラが呟く。辺りの煙が晴れてくると、マハトが仰向けで倒れているのが目に入った。諮ったかのように、一発の弾が心臓に命中していた。リュートが撃ち込んだ弾。それが、マハトの息の根を止めたのである。

【3】後処理

「僕……僕……人を殺してしまったんだ……」

我に返ったリユートは、突然ガタガタと震えだした。

「僕は人を殺してしまったんだ！僕は人殺しだ！」

絶望したように言いながら、リユートは泣き叫んだ。サエラは何か、胸が締め付けられるような思いに駆られた。そして気が付くと、リユートを優しく抱き締めていた。

「サエラ……？」

リユートの泣き声が止んだ。

「アンタは人殺しなんかじゃない。私を助けてくれたのよ。ありがとう」

サエラは何故か、穏やかな気持ちになっていた。辺りに血の臭いが充満し、さらに自分が全身に酷い痛みを感じているのにも関わらず。

「サエラ、僕」

リユートが言いかけるのを遮り、サエラは抱き締めている腕を解いた。

「とにかく、この状況を何とかしなくちゃ。幸いこの周辺に民家は無い。銃声が外に漏れてなければ、事態を隠蔽するのは簡単よ。リユート、あなたはダンを病院に運んで」

サエラはダンの方を向いた。マハトに一発を撃ちこんだ後、再び意識を失ってしまったらしく動かない。

「当然だけど、こんな状態の人間をジュエルの病院に運んだら、マスコミも動いて大問題になる。マラザの『裏病院』というところに運ぶの。」

表向きは代行運転会社になってるけど、ダンは元々そこに入院し

てたから、行けばすぐに通してくれると思うわ。代行運転会社をカーナビで検索して連れて行って。ついでにアンタも、肩の傷を手当してもらいなさい」

「分かったよ。サエラは？」

「私はコイツを始末する」

今度はマハトの遺体を見るサエラ。

「始末って……大丈夫なの？」

「アンタね、私を誰だと思ってるの？ 私は元殺し屋よ？ こんなこと、日常的にやってきたことだから。アンタは安心して、病院に向かつて。私もすぐ追いかけるから」

「……分かった、待ってるよ」

ダンの巨体をリユート一人で動かすのは、相当困難なものだ。サエラが手伝っても、かなりの時間がかかった。とは言え肋骨を負傷しているサエラは、ほとんど力になれなかったのだが。

それでも何とか二人がかりでリユートの車に運び、リユートはマラザに向けて車を出した。リユート宅に残されたサエラは、まずマハトの遺体を片付けることにした。

（死体処理なんて久しぶり……）

死体処理は、残忍な方法で行われる。身元が分からないよう、粉々にすることから始めるのだ。それを砕いて生ゴミに混ぜてしまう……。殺し屋時代は平気でやってきたことが、久々の作業のためか少々手間取ってしまった。

それでも無事に遺体を処理し、後は現場の掃除だけ。血液を全て拭き取り、割れた窓ガラスを片付ける。だが死体処理にしても掃除にしても、今のサエラにとっては苦痛だった。

（痛みさえなければ……）

マハトに投げ飛ばされ、全身を打撲している上、肋骨の骨折。これだけ負傷しているサエラにとって、重労働は過酷なものだ。

本当ならこのような作業をするのも、投げ出したいくらいに厳しい状態だった。それは自分自身よく分かっていたのだが、何より精神的にかなり参っているであろうリユートを助けたかったのである。その気力だけが、サエラを動かしていた。

(それに、ダンも……)

ダンはまともに弾を受けている。病院に着けば、即刻手術になるだろう。早く現場を片付けて、二人の様子を確かめに行かなければ。サエラは痛みを堪えながら、手早く片付けを済ませていった。

片付けを終えたサエラは、タクシーを呼んでマラザの町に戻った。すぐに裏病院に行き、病室へと向かう。サエラの予想通り、ダンは手術室で緊急オペを受けていた。リユートは肩を手当され、病室のベッドで横になっていた。

「サエラ！ 大丈夫だったかい？」

「ええ、こっちは片付いたわ。ダンはどうだった？」

「手術で傷口を塞いで、あとは安静にしていれば大丈夫だった。命に別状は無いよ」

リユートの言葉を聞いて安心したのか、サエラは床に崩れ、膝をついた。

「サエラ！」

叫びながら、リユートはベッドから起き、サエラに駆け寄った。

「大丈夫……体が痛むだけよ。正直、ちよつときつかったわね」

サエラの額には、脂汗が浮き出ている。危険だと判断したリユートは、すぐに看護師を呼んだ。サエラは治療を受けるため、すぐに処置室へと運ばれていった。

【4】生きる理由

サエラが処置を終える頃と、ダンの手術が終わったのは、ほぼ同時刻だった。ダンもサエラも、リユートと同じ病室に通された。

ここは裏病院というだけあって、何か「訳アリ」の負傷者たちが集まってくる場所。誰がどんな傷を負っていたようと、何も追求されることは無い。リユートは当然、このような場所に来るのは初めてだ。この病院のシステムに、少しだけホツとしていた。

ダンは麻酔が覚めず、まだ眠っている。サエラとリユートは、ベッドに腰掛けて話が出来るような状態にあった。サエラの肋骨は二本折れていたものの、複雑な折れ方をしていただけではなかったため、治るまでに時間はかからないとのことだ。リユートの肩の傷も、深い傷ではないので、早いうちに治るだろう。

「よかった、みんな命に関わるような怪我じゃなくて」

リユートの言葉に、サエラも頷いた。

「ダンには相当な重傷だけど、あの人くらいの殺し屋なら、簡単に復活するわよ。今まで、たくさんさんの修羅場を潜り抜けてきただろうし。私もそうだけどね。このくらいの傷、大したことないわ」

「サエラ……ずっと、そんな危険な目に遭ってきたっていうんだね」「仕事だもの。でも……今となっては、もう関係の無いことよ」

そう答えつつ、サエラの頭には一つの心配があった。それは、ダンの怪我が完治したときのことだ。

マハト殺害を依頼したとき。ダンはサエラに、ある条件を出していた。「命をかけた勝負をする」という条件を。マハトが死んだ今、トドメを刺したのがリユートだったにしても、依頼は遂行されたということになる。それに、マハトを倒すための突破口を開いたのは、ダンが撃ち込んだ弾だったのだから。

きつとダンは、回復したらサエラに戦いを挑んでくるだろう。サエラは複雑な心境だった。せっかくリユートを守り、自分もダンも命を落とさずに済んだ。それなのに、自分とダンが戦えば、どちらかが命を落とすことになる。今はそれが「嫌だ」とはつきり自覚できた。

自分が死ぬのが怖いわけじゃない。ダンに勝てるわけがないと絶望しているわけでもない。ただ、サエラにはダンを倒そうとは思えなかった。マハトと一緒に倒した戦友とでも言うのだろうか。情のようなものが沸いてしまったのかもしれない。

(ルイの言ってた通り……私、変わってしまったのかもしれない) その変化が、サエラにとって良かったのか悪かったのか、それは判断できなかった。でも確かに、サエラは変わった。何よりも、死にたくない理由が出来たのだ。

殺し屋をしていた頃、サエラは捨て身で依頼を遂行してきた。リユートにも話したことが、今よりもさらに酷い重傷を負ったことだ。それでも殺しに全てをかけてきたサエラ。そんなサエラが、自分の命を大切にしたいと思えるようになった理由。

「一つ、アンタに言っておきたいことがあるの」

サエラの申し出に、リユートは「うん？」と首を傾げた。

「今回の件で、アンタは私をかばおうと躍起になってたけど……これから危険な目に遭ったとしても、私をかばおうと無茶しないで。アンタには適応能力が無さ過ぎる」

「ごめん。でも、必死だったんだ。サエラを守りたくて……」
しゅんとして俯くりユート。

「その気持ちは嬉しいわ。大丈夫、私は自分の身は自分で守るから。それに、アンタのことも 私が守る」

「え？」

顔を上げたリユートに、サエラはツンとした表情で言った。

「アンタ、私がいなきゃ自分の身を守れないでしょ？ 放っておけなくなっちゃったのよ。」

アンタ大企業の社長だし、また変な輩やかいに狙やわれることがあるかもしれない。守ってくれる人間が必要でしょ？ その役を、私がやってあげるって言うてるの」

それがどんな感情を意味するのか、サエラには理解出来ない。でも確かに、リユートを守りたいと思っている自分がいるのだ。それは揺ぎ無い事実。

「これからもずっと、傍にいてあげるわ。ううん、傍に………いたいと思うのよ。何なのかしらね、この気持ち」

サエラは前髪をくしゃつとかき上げた。そんなサエラを、リユートは幸せそうな瞳で見つめる。

「ありがとう、サエラ。君の気持ちは、すごく伝わったよ。僕の方こそ………これからも、君の傍にいさせてほしい」

リユートの澄んだ瞳を見て、サエラは静かに頷いた。

〈最終段階〉【1】取消

ダンが目を覚ましたのは、手術から丸一日後のことだった。目を覚ましてからは意識もしつかりしており、傷の完治までは程遠いものの、会話も食事もできるまでに回復している。幾度も修羅場を乗り越えてきた殺し屋だからこそ、と言える程の回復力だった。

サエラ、リユート、ダンと、カーテンでベッドが仕切られただけという同じ病室を共にし、ただベッドに横になっているだけの時間だったが、病室に敵意や邪悪なムードが漂うことも無く、平穏なものだった。

社長が不在となったハーツの方はと言うと、リユートの命が狙われ、さらに負傷したことは隠しておくことにしていた。会社での噂や混乱を広げると、社員の不安を煽ることになるという、リユートの配慮だ。

リユートは高熱を出し、その看病にサエラがあたっている。会社の幹部にそれだけ連絡し、二人は会社を気にすることなく、落ち着いて入院生活が送れることになった。

「サエラ」

マハトが死んでから三日後の夜、ダンがベッド横のカーテンを開け、サエラに声をかけた。サエラも自分のベッドの横のカーテンを開け、顔を出した。

「顔色、大分良くなってきたな」

「おかげさまで。痛みも大分引いてきてるわ。あなたも、あれだけの重傷を負っていながら、とんでもない回復力ね。普通の人間なら体を起こすことも不可能なくらいの大怪我だって言うのに」

お互いの体調を確認し合う二人の会話に、リユートはベッドに横になったまま、黙って耳を澄ませた。カーテンで区切られただけの空間なので、話し声は丸聞こえなのだ。

「で、何か用？ 私の様子を伺いたかっただけじゃないんでしょ？」
「ああ、マハト殺害の依頼のことだ。何はともあれ、マハトは死んだ。奴の命を奪ったのは俺だけの力じゃないが、ターゲットが死ねば、それは依頼完了と言うことになる。殺し屋界のルールだから、それはお前も承知のはずだ。覚えてるか？ 依頼を受けたときに出した『条件』について」

ダンの言葉が引っかかり、リユートはカーテンを開いた。ベッドで体を起こし、二人が話をしている姿が目に入る。サエラとダンも、顔を出したリユートに目を向けた。

「あの、『条件』って何ですか？」

少し厄介なことになった、とサエラは内心想った。『条件』命をかけた勝負のことについて、リユートは何も知らない。サエラが条件を呑んだことを知れば、リユートはどう思うだろうか。だがそんなサエラに構うことなく、ダンも条件について口にした。

「サエラから依頼を受けたとき、俺は一つの条件を出したんだ。『マハトを倒したら、俺とお前が命をかけた勝負をする』と。俺がサエラを狙っていたとき、着けられなかった決着。それを着けるために、な」

ダンの言葉に、リユートは驚いてサエラを見た。

「どういうことだよ！ サエラ、そんなこと言っただけじゃなにか。分かるだろ、この人の実力。だからこそ、この人に依頼をすることに決めたって言うのに。どうしてそんな大事なこと、僕に黙ってたんだよ……」

条件について黙っていられたのがショックだったのか、リユートの声はだんだん小さくなった。

「仕方ないじゃない、マハトを倒すためだったんだから。それにアంతにこんなことを言ったら、絶対に止めたでしょう？ だから黙っておくことにしたの。」

……確かに私は、ダンに勝てるほどの力を持っていないかもしれない。それでも　負けると分かっているとしても、ダンに頼るしかないよ」

悲しそうに、リユートに向かって微笑むサエラ。だがすぐに、ダンの方へ顔を向け直した。

「分かっている。お互いの傷が完治したら、出された条件の通り、命をかけて勝負しましょうか。私の方が回復は先のはずだし、あなたが完治するまで、私は自分の能力を高めておくから。そうでもしなきゃ、あなたに勝てる見込みは一パーセントも無いものね」

腹を括ったように言ったサエラに、ダンは首を横に振った。

「条件は　無しにしよう」

「どうして！？　そんな急に、無しにするだなんて……」

いきなりの言葉に動揺するサエラ。ダンは自らの体に目を伏せると、胸に巻かれている包帯にそっと手をあてた。そしてゆっくりと、自らの思いを語り始めた。

【2】選んだ道

「見る、この包帯だらけの体を。無様な姿だ。一步間違えば、そしてお前たちの存在があの場合に無かつたら、俺は確実に死んでいただろう。」

自分の力を過信してただけで、俺はまだまだ弱い。もっと強くならなければ。お前と戦ったところで、俺の実力が上がるわけじゃない。一人の女性が犠牲になるだけだ」

「一人の……女性？」

サエラが呟くと、ダンは頷いた。

「俺とお前は、互いに殺し屋として出会った。だからケイトからの依頼を通して、殺し合うという立場に置かれた。殺し屋を辞めても、お前の心の中には、殺し屋としての気持ちが強く根付いているものだと思っていた。」

でも今のお前には、殺し屋としてじゃない生き方を選んでいる。つまり俺にとって、お前はライバルでも敵でもなく、一人の女性でしかない。

そんなお前とやり合って、もしお前が命を落とせば、俺は『殺し屋』じゃなく、ただの『人殺し』だ。『人殺し』に成り下がったら、それはマハトと同じレベルの人間ということになる。

俺はアイツのような軽々しい、あるのか無いのか分からないような信念で、殺し屋という道を選んでいるんじゃない。だからこそ、お前とはやり合えないんだ」

ダンの言いたいことは分かった。「殺し屋」と「人殺し」の違い。それは元殺し屋であるサエラも、よく理解している。

「そうね……。私はもう、殺し屋じゃない。ハーツの社員だもの。会社に 社長に、迷惑はかけられないしね」

サエラはそう言うと、チラッとリユートに目をやった。リユートは条件の取り消しに、心から安堵しているといった表情を浮かべていた。これでもう、サエラとダンが死合うことは無くなったのである。

「ありがとう、ダン」

サエラが言うと、ダンは首を横に振った。

「礼を言われるようなことじゃない。俺は殺し屋としての、そして俺自身の信念を、絶対に曲げたくないだけだ」

そう言うと、ダンは笑みを浮かべて見せた。初めて見るダンの微笑みに、サエラは何故か不思議なものを感じた。

「あなたの笑顔　素敵ね」

「何を言って……」

驚いているダンに、それまで黙っていたリユートも続けた。

「うん、サエラの言うとおりですよ。すごく優しい微笑みに思えました。ダンさん、本当は心優しい方なんですね」

「ふっ……参ったな。まさか、そんなことを言われるなんて。殺し屋である俺が、心優しい？　リユート、君みたいな優しい、そして人を疑わない純粋な心の持ち主だからこそ、つけ入れられ、そして狙われる可能性が高い。これからも、十分気をつけるんだな」

「そんなこと無いですよ。僕はもう、この手で一人の人間に銃を向けてしまったんですから。でももう、弱音ばかり言っていられませぬ。確かに、ハーツを狙う奴はたくさんいるでしょうから……。僕は、これからもっと強くなります。心も体も」

リユートは決意と共に、大きく頷いて見せた。リユートの笑顔に、ダンは目を伏せた。

「強くなつたな、お前」

二人の様子を見て、サエラは微笑ましい気持ちになった。

「さて……。俺はそろそろここを出る。のんびりしている暇は無い

「からな」

「ダンはその言いながら立ち上がった。」

「そんな体で？ 大丈夫なんですか？」

「リユートは心から心配そうに、ダンを見上げた。」

「大丈夫だ。前にマハトにやられたときだって、このくらいで出ていたからな」

「すごい体ですね……」

「驚きを隠せないリユート。」

「お前たちは、ゆっくり傷を治すんだな。 また何かあったら、

いつでも連絡して来い。 ハーツやお前たちが狙われたときは、俺も力になる」

「ありがとうございます、ダンさん」

「礼を言うリユートに続き、サエラも頷いた。」

「あなたとこんな風に会話できるようになるなんて、殺し屋だった頃は思いもなかったわ。 分からないものね、人生なんて」

「俺もそう思う。……そろそろ行く。 じゃあな」

「ダンが身を翻すと、簡単に荷物をまとめ、すぐに病室から出て行った。 サエラとリユートはその背中を見送ったあと、顔を合わせた。 「ダンさん、悪い人じゃなかったね」

「……そうかもしれないわね。 彼は殺し屋としてのプライドと信念を持って。 強い男だわ」

「サエラもリユートも、お互いに穏やかな気持ちだった。」

【3】終着

ダンが病院を出てから二日後の朝、サエラとリユートも家へと戻ることになった。リユート宅は人が死んだ現場になってしまい、とてもそこに住む気にはなれなかったので、一旦会社の社宅マンションの一室へ移ることにした。

そのうちリユートの所有している土地は売りに出し、また別の土地を買うことになるだろう。そして新しく家を建てる予定だ。

「サエラもジュエルに住んだらどうだい？ マラザから毎日仕事に通うのも、結構面倒だろう？」

「いえ、私はマラザに住むわ。殺し屋を辞めたとしても、住み慣れたあの町は離れられないわよ。ルイもいるしね」

サエラは近いうちに、ルイの店にも顔を出すつもりでいた。マハトが死んだという情報は、サエラの処理によって、マスコミに触れることは無いだろう。だが情報屋の耳には、何らかの形で届くはずだ。サエラが顔を出さなければ、ルイは心配するだろう。

「僕も行っていいかい？ ルイさんに会いに」

「当たり前じゃない。とびきりの酒と食事、用意してもらいましょう」

その夜、定休日の『Town of darkness』店内には、サエラとリユート、ルイの姿があった。

「とにかく、二人とも無事でよかった。俺から言えるのはそれだけだ」

店内には、鶏肉を焼く香ばしい音と、ハーブの香りが充満している。今晚の食事のメインディッシュだ。

「恐ろしい男だったわ、マハト。殺人鬼と呼ばれていた訳も、何となく分かった気がする」

いつものようにカウンターに腰掛け、焼酎の入ったグラスをカラカラと鳴らすサエラ。隣では、リュートがサラダをつついている。

「最初に僕が撃たれたときも……窓の外から何の気配も感じなかったんだ。本当に突然、窓ガラスが割れた感じだった。人って、あんなにも気配を殺せるものなんですね」

半ば感心したように言うリュート。

「奴はプロの中のプロだったんだ。そのくらいは当然だったかもしれないな」

ルイは完成したチキンのハーブ焼きを皿に盛り付けると、サエラとリュートに出した。

「美味しそう。いただきます、ルイさん」

嬉しそうに、リュートはナイフとフォークを手にした。

「君には料理の出しがいがあるよ。いつも美味しそうに食べてくれるからね」

チキンを頼張るリュートを、ルイは微笑ましく思いながら見つめた。サエラもチキンを口にいしている。

「さて……。これで一段落着いたことだし、安心して仕事に戻れるな」

「そうね。でも、またいつ狙われるか分かったもんじゃやない。これからも常に、非常の事態を頭に入れておくつもりよ」

サエラの言葉に、リュートも頷いた。

「そうか、大変だな。リュート、君はそれで大丈夫なのか？」

「大丈夫って？」

フォークを使う手を止め、ルイを見上げるリュート。

「君みたいにごく普通の若者が、命懸けで社長を勤めなければならぬ。そのプレッシャー、君にとっては重過ぎるんじゃないか？」

「確かに……命を狙われたら怖いし、僕みたいな実力不足の男が社長なんて、本当に勤め上げられるのか不安はいっぱいあります。で

も、僕にはサエラがいてくれるから」

ルイはフツと笑みを漏らした。

「サエラに守ってもらおう、ってか？」

「いえ。サエラがいてくれるから、僕は強くなるうと思えるんです。サエラを守るため、そして自分も守るために……」

リユートの目は、強い意志で輝いていた。

「そうか。それだけの気持ちがあれば、きっと大丈夫だろう。」

なあ、サエラ」

空になったグラスを置くサエラ。

「そうね。思ったより骨のある男よ、リユートは」

サエラは隣のリユートに目を向けた。そして、小さな声で呟く。

「だからこそ、リユートの傍にいたいって思えたのかもしれないわね」

リユートは首を傾げた。

「ん、何か言った？」

「何でもないわ」

そう誤魔化したサエラは、ルイに二杯目の焼酎を頼んだ。

「ほら、アンタも飲みなさい」

ルイは二杯の焼酎を、二人の前に差し出した。

「私たちの無事を祝して」

サエラとリユートは、今こうして互いに生きていることを実感しながら、静かにグラスを合わせるのだった。

(了)

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8644c/>

続・暗黒ノ町 ~ R e w a r ~

2009年6月8日03時33分発行